HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	座談会・小川晃一教授を囲んで
Citation	北大法学論集, 40(5-6下), 1445-1492
Issue Date	1990-09-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16745
Type	departmental bulletin paper
File Information	40(5-6)2_p1445-1492.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

座談会

小川晃一教授を囲んで

日本ファシズム研究——研究生活の出発

松沢(司会)　これまで『北大法学論集』の「退官記念特集」では、どなたかが、退官なさる先生の「経歴と業績」を書く慣行でした。けれども小川先生の場合、研究業績が非常に多岐にわたっていまして、一人でそれをまとめるということは到底できません。そこで、みんなで先生からお話しをうかがって、それをまとめることにいたしました。その準備に、小川先生が自分で作られた業績一覧を眺め、また書物や論文を読み返したりしまして、こういう印象を持ちました。一九五〇年代の早い時期から今日まで小川先生の学問的関心の発展は、喬喬たる欅か樫の木を連想させます。問題の根本をとらえた、幹のようなすじが非常に一貫しております。それが成長すると、そこからある時期に新しい関心がいわば枝わかれして、そのわかれた枝がまた成長してゆく。幹からは、またある時期がたつと新しい関心が枝わかれしてゆく…。ですからお話しをうかがうのに関心＝テーマに即してうかがうか、時期に従ってうかがうか、世話人が考えて見たのですが、今申しましたような、小川先生の

研究の関心＝テーマの発展の特徴からして、時期に従ってうかがうことがおのづからテーマに従ってうかがうことになるんじゃないか、という結論に落ち着きました。御覧のように一から九までの項目に、テーマをわけましたが、これが大筋で時期の流れに即して枝わかれしている。とともに、初期からのテーマが次第に多様になっていく様子がたどれるのではないかと思います。で、この順を追ってうかがってまいりますが、『法学論集』に載せる成稿は「正史」になります。時間が限られていますから大事なことから質問して、大事なことからお話しいただきたいと思います。私は一番早くから小川先生の近くにいて色々お話しをうかがっているということで、全体の司会をお引き受けしました。この業績リストのおもてには出てまいりませんが、小川先生は、実は同時代の日本の現実に深く関わるような仕事をなさっています。その辺について、多少うかがって皮切りにさせていただきたい。

小川先生には自伝的な文章は少ないように思えますが、トクヴィル研究の大著の序文で、まれな例だと思うんですが、自分の研究史について回顧されている文章があります。「五年間というもの文字通りトクヴィル研究に専念した。……自然わが身をトクヴィルの立場に移しかえ、やがてはトクヴィルの視点で政治の世界全体をみるほどになってしまった。」小川先生の研究は業績リストでもわかるように、トクヴィルから始まっています。けれども実は、トクヴィルにはいられる前に日本のファシズムをとりあげられた論文があります。日本ファシズム研究から入ってトクヴィルにゆき、五年の間トクヴィルに没入する。その後六一年に「保守主義的態度」を『思想』に、六三年には「一九世紀における政党政治の一断面」と、「英国における政治的階層」という二つの論文をお書きになっています。そのいずれもがトクヴィルからの発展ではないか、とくに六三年の両論文はトクヴィルにおける英仏政治の比較論から枝分かれしたのではないか、そういうふうに想像します。そういうわけで学問の出発点となった、印刷にはなっていませんけれども、大学在学中に書かれた日本ファシズム論についてうかがいたいと思います。私は拝見していませんが、丸山先生が、ユニークなおもしろい論文だった、とおっしゃっていました。読まないで言うのは乱暴ですが、五〇年代に盛んだったのは、いわゆる天皇制ファシズム論ですが、先生の日本ファシズム論はそういう天皇制ファシズム論的な一般の傾向とはかなり異色なものだったんではないか、と考えるのです。これは想像ですが、大衆という問題を取りあげているのではないか。つまり、天皇制ファシズ

ム論の場合、日本資本主義の未成熟、前近代性に注目して概して後ろ向きに議論するのですが、小川先生はそうではなくて、大衆という問題をとりあげて、歴史の将来への見通しをつけていく、そういうアプローチをなさったのではないか……。乱暴な推測ですが。どういうきっかけで日本ファシズムについて論文をお書きになったのか、また、その特徴、出来れば同時代の天皇制ファシズム論などと比較した特徴と二点になりますが、この辺からお話しを始めていただければと思います。

小川　どうも、こういう席を設けていただいて感謝しておりますが、そのうちに拷問みたいなことになるんじゃないか…。（一同笑）まあ出来るだけざっくばらんにお話ししたいと思います。日本ファシズム論を書いたのは、大学の五年目です。四年目である会社に行くことにしていたんですけどもやめて留年しようと思ったのです。ところが僕は四年目の秋に単位をみんな取ってしまった。そうすると、自動的に追い出されてしまう、九月卒業です。いつ卒業したのか自分でもわからなかったんですけど、卒業免状が送られてきて、あれっ、と思ったんです。その時、丸山先生の所に行きまして、「会社に勤めるのは僕には向いていないから勉強したい」と言いました。そうしましたら、先生が、何か論文みたいなものを書いてこい、とおっしゃったのです。一ヶ月か二ヶ月ぐらいで日本ファシズム論を書いて丸山先生のお宅に届けました。今でもはっきりと憶えてるんですが、先生の前に僕が座った。丸山先生がどういうふうに読んでくれるかなと思って。丸山先生がパラパラ読んでゆくんですけど読み終って、じゃあおまえ勉強してもいいと言われたんです。それで、丸山先生は当時札幌にいらっしゃった尾形先生と相談して、北大の助手に採用するようにして下さったのです。それから四～五年、東大の丸山先生の部屋に置いてもらいました。ですから、僕が勉強できるようになったのはひとえに丸山先生のおかげです。拾われたと思って、心から感謝しております。そういう論文だったのです。お前勉強してもいいと言われた時は、天にも昇る気持ちだったですね。

それでは、何故日本のファシズムをやったかというと、僕が高等学校の時、ものの見方、思想とか、プリンシプルとか言うと大袈裟ですけど、ものの見方で影響を受けたのは、氷上英広先生ではなかったかと思っております。氷上さんのお話でキルケゴールの『現代批判』を訳したこともありました。氷上先生が手直ししましたけれど、放棄してしまわれました。キルケゴールも勉強しましたし、法学部に入ってからもハイデッガーの『存在と時間』など二、三年読んでいました。僕が一高の二年目頃

でしょうか、一高の中でマルキシズムが非常に盛んになりました。上田耕一郎とか不破哲三とか、高沢寅男とか、不破は後藤昌次郎たちのいる僕の部屋によく遊びに来てました。一方こうしたマルクス主義の流れがありながら、他方ではあの原口統三とか橋爪とかがおりました。世紀末フランス文学も盛んに読まれました。マルクス主義的な人たちも、こうした空気は理解できたと思います。心のどこかにデカダンスにひたるものがあった。氷上先生は僕たちの世代を「精神的孤児」だと言っておりました。僕はマルキシズムの方ではなくて、デカダントの方でした。もっと正確に言えば「まじめな」デカダント、良く言えば実存主義的でした。やはり氷上さんの影響だと思いますが。

氷上先生は南原先生の女婿で、丸山先生は南原先生の高弟ですから、氷上先生から丸山先生のことや南原先生のことが伝わってくるわけです、一高の時から。氷上先生は当時丸山先生に批判的でした。丸山さんは歴史主義的であり、総てのものを相対化してしまう、そうだとやがてニヒリズムに道を開いてしまうのではないかと。丸山先生はその頃から非常に評判だったのですけれども、こういうわけで氷上先生からの影響が強かった。大学にいってからもやはり、ハイデッガーを読んでいたし、堀豊彦先生の講義は、あまりリアリスティックではありませんでしたが、非常にアカデミックで、ドイツの西南学派なんか引用する。僕はむしろそういう哲学の方に惹かれてました。ところが、ある時、『世界』に出た丸山先生のファシズム論・天皇制批判を読んだのです。それが丸山先生の論文を読んだ最初のものでした。ものすごい衝撃を受けました。憎らしいという感じでした。やがて、そうした勉強をしなければ、と考えるようになったのです。ですから私は二股になったわけです。実存主義的なものと丸山先生的なものと。日本のファシズムをやるようになったのは、その時読んだ丸山先生の『世界』の論文がきっかけです。「超国家主義の論理と心理」だったですかね。丸山先生の論文も、日本ファシズムを論ずるのに上の方ばかりだった訳でないんですが、当時上からのファシズム、下からのファシズムという言い方がしょっちゅうされていました。ヒトラーの場合は、下からのファシズム、日本の場合は、上からのファシズムだという、それが常套語みたいになっていた。日本のファシズムをヨーロッパのそれと比較して日本の場合、下からのファシズムというのが全く無かったのか、僕はどうもおかしいというふうに思ったのです。実際戦争中僕自身天皇制に夢中になりまして、下の方でも相当いかれたはずなんだ。それをみんな上の方にばかり目を向けているのはおかしい、ということで

日本でも下からの面をやってみる必要があるというのが、その時の論文です。ただ、僕の論文は下からの立場だけかというと、僕もそういうふうには結論づけてはいません。二冊にとじた原稿のうち一冊が大学紛争中に何処かへ行ってしまって手元にないのではっきり言えないんですが、今、憶えているのは、上からの動きと下からの動きと日本のファシズムに両方の面があった、両面つかず離れず相互関係で進んだという結論だったですね。

それから、大正デモクラシーには僕もかなりいかれてましたし、一高の時は大正教養主義もありましたから、それは無視できない要素だと考えていた。だから、ずっと昔しの古い時代から一貫して絶対主義だというふうに割り切ることもできなかった。また、日本の軍人は成り上がり者だから、上から強引に権力を握ってみたくても、軍部を上からぐっと押えつけてファシズムを進めることはできなかった。最初は民間右翼が威勢のいいことを言って、それに上の者がちょっとくっつき、さらに軍隊の下の方で二・二六みたいに動くと、今度はそれに迎合して、やがて上がファシズム進める……、上と下である時には合意しながら、あるときにはつき離しながら暗黙の内に利用しあい、下の方がむしろぐっと先にでるが、しかし、その下の方の者は権力が取れず、上の者がそれを利用して、ファシズムを進めていく、こういうふうにして進んだ。上と下両方から進んだのだ、そのきっかけをつくったのは下の方であり、権力を握って進めたのが上の方だ、という結論だったと思います。藤田省三氏はファシズム論を絶対主義論からやったでしょ。マルキシズムの立場がそうだったでしょう。弁護士をしている後藤昌次郎氏は僕の親友なんですけども、マルキスト的な日本ファシズム論だった。僕はその時期しょっちゅう彼と会っておりましたが、彼との議論に、私はかなり助けられたと思います。

そういうふうに、日本ファシズムも下の方からもみなくてはだめだというところから次に、マルクスの『ブリューメール一八日』を読んでみたのです。読みはじめて非常に感激しました。ルイ・ナポレオンが人民投票で下からのし上って行く。それでフランスのこと、ボナパルティズムをやらなければいけないと思いました。そんなわけでフランスの政治思想・政治の動きをやってみたいと丸山先生に言いましたら、じゃあトクヴィルをやったら、と言われました。それでトクヴィルの勉強を始めたわけです。その間、マルクスの勉強がちょっと入ったけれども、それは『ブリューメール一八日』他一、二の本だけだった。トクヴィルやったときにもやはり大衆が専制政治、独裁政治を生

む、という考えで入っていったんです。この点はおもしろいんですが、トクヴィルの考え方の力点はどうしても、大衆に支持されて独裁制がでてくるというのではないんですね。むしろトクヴィルは、新らしい社会での専制は官僚化、集権化から来る、その中で人間がふやけていくというものです。ところが、当時の丸山先生はそんなはずはないと言うんです。トクヴィルが言うのは、流動化された、荒れた社会において、大衆がイラショナルになって、独裁者を押し立てるっていうことだ、トクヴィルはナチズムの予言者、独裁的なものの予言者だ、大衆社会における独裁制の登場を予言したんだとおっしゃる。いくら僕が反論しても先生はお認めにならない。丸山先生は、もしトクヴィルが僕のいうような考え方ならたいして意味がないじゃないか、ナチズムの予言者たるトクヴィルなら立派だけど、官僚制・行政が自由の抑圧になるということだったら意味がないとおっしゃる。丸山先生は、それからしばらく経ってから意見変えられたのではないでしょうか。そういう記憶があるのです。

松沢　今、おっしゃったことで日本ファシズム論からトクヴィルへどのようにいらしたか、というすじ道がかなりはっきりしてまいりました。そこでトクヴィルに移りまして、川崎さんに……。

トクヴィル研究

川崎　まず最初に、先生の初期のトクヴィル研究の問題意識についてうかがいたいと思います。「『アメリカ・デモクラシー』研究の現状」や「トクヴィルの大衆社会理論」を書かれた当時の問題意識は、日本ファシズム論への御関心からの連続と考えてよろしいでしょうか。

小川　ええ。それと、トクヴィルは日本ではあまりやられていないからやったらどうかと丸山先生がおっしゃって。

川崎　御本の方を拝見しますと、先生は序文でその後トクヴィルについての見方や評価がかなり変わったというふうに書いてらっしゃいますけども、その後の変化はいつ頃どのように起っていったのか、先生におけるトクヴィル研究の変遷・展開を御教え願いたいと思います。

小川　僕、トクヴィルを四〜五年ずっとやりまして、もううんざりしたんですよ、トクヴィルをやるのが。（一同笑）早く他のテーマに移りたいという気がありました。丁度そのころ大衆社会論を『思想』で特集しようというようにどなたかが言ったのでしょう。それで松下圭一さんの大衆天皇制論、それから田

口富久治さんのファシズム論、あの傍点がもの凄く打ってある論文などがのりました。僕も書くことになっていたんです。ところが、僕がどうしても原稿ができませんでね。実はそのころ僕はトクヴィルがはたして大衆社会論者と言えるかどうか、その点非常に疑問に思っていたのです。トクヴィルの時代は、マルクス主義者の人が、非常に断定的に、一九世紀自由主義デモクラシーの時期であって、マスデモクラシーになるのは一九世紀末からだというふうに言ってまして、だから僕も一九世紀に書いたものがマスデモクラシーの予言者でありうるのか、一九世紀というのはブルジョア社会でないか、だからマスデモクラシーというものを描けるかどうかということで非常に迷っておりました。で、しょうがないからミルの自由主義とトクヴィルの自由主義とを比べてどこが違うかこれをやってみようと思って両方の比較を始めたのです。少なくとも当時の日本ではミルは正統的な一九世紀自由主義者といわれてましたから。でも、ミルについても完全に自分の意見を出すことができなくて、ミルの研究史を書くということで他の人から遅れて『思想』に出したのですけども(ちなみにこれが私の最初の論文です)、そこでもトクヴィルとミルがどういうふうに違うかってことが頭にあったのです。

四〜五年やりまして漸くトクヴィルが大衆社会の予言者であるというふうに自分でも割り切れるようになりました。でもまだ完全じゃなくて「大衆社会」でなくて「民衆社会」という言葉を使い、そういう妥協をしました。しかし、民衆って言葉も少し違う。フランスではプープルというものから大衆社会ができたのではなくて、ブルジョア的なものが広がりやがてそれが変化して大衆みたいになったのであって下からいくんじゃない。しかし、マスデモクラシーを生む政治のダイナミズムは下からなきゃだめだ、そんなふうに考えているうちに次第にトクヴィルを大衆社会の予言者だとみてよいというふうになりました。今でもそう割り切ってますが、もう六〇年頃にはそういうふうに割り切っておりました。

トクヴィルの評価が変わったのはオックスフォードに行ってからですね。その当時、六四年にオックスフォードに行く前まで、僕はあらゆる論文を書くとき、文章を一行書くとき、もしこれを書いて丸山先生がこれを読んだらどういうふうに思われるだろうかって、全て僕が書く基準は丸山先生だったですね。丸山先生が僕の座標の原点だった。ところが、オックスフォードに行ってからは丸山先生が座標の原点ではなくなったのですね。優秀な人はいくらでもいますから。(一同笑)それで座標の

原点が丸山先生からオックスフォードに移ったわけです。もう日本の誰も基準にすまいと思った。そして、そこでまた僕は理論信仰から解放された。丸山先生は理論信仰というのを批判してますけれども、僕はそれまで丸山先生以上に理論信仰だった。ところがオックスフォードでは理論派は全然通用しない。そう思ってトクヴィルを見ると、彼はやっぱり天性的に理論家だと思いました。どんな事実・データを見てもその中に一般的なものを貫らぬかせているし、一般化する、体質的にそうだと思いました。だから座標の原点をオックスフォードに置くようになったときにトクヴィルの視点というのをよけいに批判するようになった。実証性ということを少なくとも心掛けるようになったですね。座標の原点が違ったということとオックスフォードの歴史学に非常にいかれたということで、従来の僕の行き方も様変わりしたし、批判するようになったですね。それと同時に従来のトクヴィルについての見方もかわりました。そのイギリスの体験が非常に大きいと思います。

川崎　オックスフォードが先生をトクヴィルから解放したわけですね。ところでもう少し話しを戻させていただきまして、五〇年代後半から六〇年代前半のことに続きますけれども、そうしますとイギリスに行くまでの間は、トクヴィル研究からものをみているという視点があった。ミルの御研究にしても、保守主義の御研究にしても、やはり最初の原形はトクヴィルであったと言ってもよろしいでしょうか。

小川　保守主義をやったきっかけはそういえると思います。ラッセル・カークっていう当時アメリカの保守主義理論の最高の理論家がトクヴィルをよく引用していました。トクヴィルを重視してるのです。ただ、カークの場合には原点はバークです。じゃあ、バークとトクヴィルを比較してみようかと、やっている間にその違いもはっきりしてきたし、トクヴィルは保守主義者と言い切れないと思った。しかし、バークにも賛同すべき点がある、ということで保守主義についての『思想』の論文を書くようになったんです。

古矢　先生は五八年の論文でトクヴィルの大衆社会論についてお書きになって、結局、今でも大衆社会の予言者だというふうに思ってらっしゃるとおっしゃった。それと先程の丸山先生がファシズムの問題を論ずる際、トクヴィルの引照のされ方がおかしいという批判とどういうふうに繋がるんでしょうか。

小川　丸山先生がトクヴィルをやるように推めたのは大衆運動の観点だったと思うのです。ムーヴメントがあってナチズムみたいなのが起ってくる。しかし、トクヴィルはそうじゃない

んです。ムーヴメントってのは大衆社会では段々少なくなってくる、規模が小さくなってゆくという。そのかわり官僚制と集権化が進んできてそれが母親的、後見人的に、大衆を保護してやると同時に規制・ルールで大衆を縛っていく。その結果大衆が無気力になっていく、それがトクヴィルの現代社会における専制主義なんです。それが丸山先生とトクヴィルの違いであったし、僕はいつも先生と違ってトクヴィルはこういうふうにみていますよって言っていたのです。

川崎　先程、先生は大衆社会というのはむしろブルジョア社会からの拡大現象じゃないかと考えているとおっしゃいましたけれども、これはトクヴィルの見解ですか。

小川　トクヴィルが大衆社会の予言者という場合、彼が現代の社会を、現代といっても一九世紀の社会、つまり当時ブルジョア社会と言われたものをよく知っていて、ブルジョア社会の中にはそういう大衆化する要因とか要素が内在し、潜在しているというふうに考え、十分な根拠をもってその潜在性を引き出すという形で将来を予測したのかどうかこれが問題です。もしそうでなければ単なるユートピアだし、そうなら単なる予言でなくて根拠のある予言になる。トクヴィルが当時いわゆる括弧付きのブルジョア社会を十分よく知っていたのか、しかもそれに潜在する大衆社会的な要素というものをそこから見通したのかということを一番問題にしました。

川崎　トクヴィルはそれを知っていたのじゃないですか。

小川　当時のブルジョア社会の中に大衆社会と言われる要素を潜在的にみたのだと思います。

イギリス滞在以前の思想史研究

川崎　分りました。では、もう一つ質問させていただきます。先生はあの頃、トクヴィルにうんざりしたというふうにおっしゃられてましたけども、保守主義論や「デカダントな社会における統合」や「利益意識の論理」等々といった政治哲学的な論文をいくつもお書きになっておられますね。それらを拝読させていただいたんですが、特に私はあの「デカダントな社会における統合」という論文が非常におもしろかった。幾つかおもしろいと思った点があるんですが、一つには視点が、私、当時の思想状況は良く分かんないのですが、非常にユニークなものであったんじゃないかっていう気がします。それで、その状況認識と言うのでしょうか、戦後イメージのような問題に恐らく具体的に関わってくるのだと思います。先生はよく先生の世代

とそれから先生よりも二〜三年上の世代とはちょっと違っていた、先生の世代にはある種のニヒリズムがあるんだということをよくおっしゃっていますが、この論文などを読むと先生の戦後イメージがいわゆる戦後啓蒙といわれたものを支えた人達における戦後イメージとは非常に違う気がいたします。まあ、象徴的に言えば坂口安吾的な戦後、とでも言うんでしょうか。そういう状況認識、或いは戦後イメージ等々というようなものがこの論文を書かしめる背景にあったとみていいのでしょうか。

小川　「デカダントな社会における統合」は丁度北大の雑誌の編集委員やっていた時に書きました。あまり雑誌に論文がでてこなかったので、僕がうんと書かなくちゃいけなくて、それで書いたんです。『思想』に書いた「利益意識の論理」はその続きとして書くはずだったのです。

川崎　ええ、その二つはどうも続いているらしいというのは分るのですが、この論文の後ろの方のこれから何を書くかというプロジェクトを見ますと非常に色々とでてきます。

小川　結局、それに対する解答はこの「利益意識の論理」の一番最後じゃないかと思いますが。

川崎　じゃあ先程おうかがいした状況認識、或いは問題関心等々についてちょっとお話しいただければ…。

小川　一つはその当時利益意識を持つということが非常に進歩的というふうに思われていたのです。つまり、戦争中は利益なんか追求すべきではない、自分の利益とかそういうものを考えるのは天皇制に反すると。天皇制の信条が支配しており、自分の利益を考えることは異端であるというわけです。利益意識を持つことが「非国民」になるんです。ところが、戦後は逆に天皇制下で主張されていたものは全て悪であって、それと反対のことはすべてよい、という雰囲気が支配するようになった。だから戦後の新しい憲法感覚を得るためには自分の利益意識・権利に目覚めなければならない、自分の利益意識・権利に目覚めるということが新憲法の精神である、というのが主流です。それは憲法学者もそうだったしマルキストもそうでした。つまり、自分の利益に目覚めることが階級意識に目覚めることであり、そのことが社会全体を社会主義的に良くすることであると、利益意識というのはプラスイメージだった。僕はこういう知的潮流に疑問を感じておりました。自己利益を主張することが果してそうなるのか、むしろ自己利益を極端にまで主張することは社会を解体する要因ではないかということをずっと思っていたのです。とにかく公共の利益という視点を重要なカテゴリーとして自分のものにしないと日本の政治はだめになるのじゃな

いか、というふうに考えていたのです。ところが当時は公共の利益というのはマイナスイメージです。公共の利益という口実で抑圧が行なわれてたわけですから。戦後の二〇年間くらいは公共の利益というのはマイナスイメージです。それが変わったのはやっぱり六〇年代じゃないですか。もっと後かもしれないですね、公共の利益という観念は重要な視点だと、国民が持たなければだめなんだと堂々と言われだしたのは。

こうした状況の中で、利益意識という観点から、社会や政治自体が上昇し、やがて衰退していくというプロセスを描くと、どういう歴史像が描けるか、というふうに考えまして、それが「デカダントな社会における統合」のもともとの発想だった訳です。社会が勃興して行くときには、これはモンテスキューの共和制ですね、共和制の精神。質素で全体の利益を考え、いわゆるシヴィック・ヒューマニズムの描くような体制です。やがて、その人々は利益意識を持ち始める。で、利益意識を持ち始めても、ある社会が急激に上昇しているときには、一方の人々の利益が他方の人々の利益にもなるという累積的成長の時代がある。多分、日本は当時そうだった。しかし累積的成長の時代が終って、ある人の利益が他の人のマイナスになるというゼロサム的な社会がやがてくるに違いない。そういう事態が見え始めたとき、そうなるとデカダントな社会の始まりなんですけども、それを喰止めるにはどういう観念がありうるか、それはやはり何らかの意味での公共性の意識ではないかというふうに考えたわけです。

「利益意識の論理」の前半では利益意識を追求していった場合に、当時言われている憲法感覚とか、或いは階級意識とか国民意識とかっていうのは出てこないということを厳密に証明してみたかった訳です。次に後半では公共の利益の観念はどこからくるのかということを扱いました。公共の利益の観念は自己の利益の観念と別な所からしか出てこない。自己の利益を中心にしているといくらその視点を開明しても公共性の視点は生まれてこない。公共の観念は利益以外の所からこざるを得ない訳ですが、それがどこからくるのかを論じたわけです。その場合、使ったのはゲーム理論やカントです。共同体という言葉は流石に使えなかったですね。当時の状況では共同体という言葉を使うこと自体が反動的だとされていたわけですから。今はもうはっきり共同体というふうに言ってますけれども、当時の雰囲気では言う勇気なかったですね。

川崎　そういう発想というのは、先生の中からどういうふうにして生まれてきたのでしょうか。

小川　自分の利益を追求することが公共の利益の観点に達するというのは本当かどうかっていうのを一〇年くらい悩んでいました。そういうこと示唆するものはどこにもなかったですから。

川崎　ええ、僕もこれはこの時期にしては非常におもしろい、あまり例がないのじゃないかという気がするのですが、それは非常にオリジナルなものとして…。

小川　僕が苦労して僕なりにやったというふうに今では思っています。

川崎　はい、有難とうございます。私の方はとりあえずこれくらいで。

中村　先生は六三年にF・M・L・トンプソンによる選挙区、ウェストライディングの研究紹介をされています。その執筆時期はイギリス御留学前です。ということは、留学体験の前からアナリティカルな研究をお始めになっていたと推測していたのですが。

小川　その頃、北海学園大の山下さんや荒木さんや東北大の阿部さんたちと、ネミアのものを一緒に読んでおりました。その一環でもあります。同じ頃「保守主義はイギリス的な適用の様式だ」という考え方に僕は非常に興味を惹かれて、そのひとつの事例としてトンプソンの研究を紹介しました。当時『思想』に「英国における政治的階層・その構造と循環」という論文を書きました。これはエリートの循環に関するものですが、『思想』の論文は学習院大の中村英勝氏などのマルクス主義ではない歴史学の方々に注目されたようです。

林健太郎氏と井上幸治両氏が当時歴史資料集を編集し始めており、「イギリス史についての資料集」の執筆の打診がありました。僕がオックスフォードへ行く一ヵ月位前に言われたものですから、当分できないといって断った記憶があります。とにかく、当時のフランスやイギリスの研究で僕みたいな立場の人は少数派でした。イギリスの政治を見るのに「ブルジョア社会」とかあんまり言わないで、「ジェントリー」とか「アリストクラシー」とか言う人はまず見当りませんでした。

松沢　六〇年前後から実証的なところへとご関心が移ってきたということはあるのでしょうか？

小川　あんまりなかったですね。やっぱり実証的関心が出てきたのはオックスフォードへ行ってからです。

中村　ちょっと今のところとの関係で一つだけお伺いしますが、アメリカ研究のところでラッセル・カークみたいな人を六〇年に取り上げるというのはかなり反時代的なことですね。ど

ういう経緯ですか？

小川　うーん、記憶にないですね、なぜ取り上げたか。あの本は確か五六年の出版ですね。僕には非常に面白かった。坂本義和さんがバークをやり、次にメッテルニヒをやったでしょ。やってる対象が坂本さんのイデオロギーと違いますが。それと、僕はドメストルをその時期に読み始めておりました。その時丸山先生が「偉大な思想家は保守主義思想家でも偉いんだ」と言われた。それからは僕はもう大胆に、偉い思想家というのは保守的・反動的な人にもいるんだ、バークやドメストルもいいところはいいんだと言い出したんです。

松沢　それは何年頃ですか。

小川　覚えてないですね。丸山先生の部屋に居た頃じゃないですか。ギゾーもそうでしょ、丸山先生の部屋に居た頃話しをされたと思います。ギゾーは政治家としてはまるっきりコンサヴァティヴでしょ、でも、書いた本は面白い。

松沢　イギリス留学前の主なお仕事についていろいろ伺いましたが、五六年の「ルソー研究序説」と六四年の「ロックの自然法論」については、まだ伺っておりません。「ロックの自然法論」は、先程から取り上げられている「利益意識」の問題と関連があるのではないかと思いますが、その辺はどうでしょうか。「利益意識」の論文で、旧い非合理性を保存するか、新しいそれを形成するかしないと、利益意識によって社会秩序は解体するとされています。そこで新しい非合理性というのは近代自然法論やプロテスタンティズムだと言われるのですが……。

小川　確かに人間は利益計算が過ぎると計算に耐えられず、気がおかしくなってしまう。だから利益計算をする場合には必ずそれとバランスがとれるよう、何らか計算を越えた価値観や規範的なものがなければ駄目だと考えました。で、自然法もそうだし、プロテスタンティズムもウェーバーが言うようにそうである。利益意識は絶えず規範的なものに伴なわれ、両方が一緒になって近代化が進んだのではないかという思いで「利益意識の論理」の中に書いたと思います。しかし「ロックの自然法論」とのつながりはよく憶えておりません。

松沢　松下さんのロック研究に対する批判のようなものはありましたか？

小川　ありました。彼は段階説で割り切っています。ロックの段階、功利主義者の段階と、段々発展していく。僕の方はキリスト教がロックの自然法の基礎にあるという考え方なんです。今にして思えば意外に現代的な見方ですけれど。「ロックの政治論はキリスト教の観点で捉えられる」というのが今の流行

ですから。「今考えると……」と自己ジャスティファイするわけじゃないけど（笑）その事は割とはっきり言っています。

ルソーの問題は、フランスをやる人がどうしてもぶつかるテーマではないでしょうか。しかし本格的にルソーを勉強した事がなかったので、ルソーの研究史を紹介する形で、その中に僕の意見を少しずつ入れました。『権力論』を書いたジュヴネルのルソー解釈には非常に共感を持ちました。それで書いてみたのです。でも今、日本のルソー研究家でジュヴネルを引用する人はいませんね。僕は非常にいいと思っているんですが。現在議論されている事柄は大概出ていますよ。あれを書いた後で福田歓一さんが学会でルソー研究を発表しまして、そのルソー解釈が僕と非常によく似ているんですよ。もともと僕はルソーをやる場合に「シヴィック・ヒューマニズム」の観点を非常に重視していました。契約論だけではルソーは判らない。古代共和制の思想、特にスパルタとの関係で見なくてはというように、福田さんも僕も考えてました。で、学会の時、ディスカッサントになってくれと頼まれて援護を引き受けた記憶があります。やっぱりフランスを考える場合、ルソーは避けられない分野でしょうね。

酒井　最初に「日本ファシズム論」を取り上げられた事についてですが、講座派的なファシズム観などに対する違和感を持たれて大衆の問題を入れて考えたというお話しでしたね。ただ、後知恵的ではありますが講座派のものの中にも例えばマスの問題等は萌芽的に見られますし、また、革新官僚についての評価も後になって指摘されるような問題が既に含まれているように思えます。当時の先生のイメージの中に、ファシズム論のヴァリエーションは存在しましたか？

小川　学生の頃に書いたものですからね……ガッチリしたものとは考えませんでした。例えば上と下との関係で二・二六事件なら山下とかああいう連中が最初に景気づけしたわけでしょ。ところが天皇が出て来たら寝返ってしまう。日本の将校はヨーロッパの将校に比べて自分だけ身をまもって退却するのが早いと言われますが、いばる割には案外ビクついてたんじゃないかと。下の者が動くとそれを利用して、ある程度庇いながら事を運ぶ。互いに利用し合いながら多元的に動いたというのが僕の考えでした。

松沢　先程「小川先生に於ける反時代性」の話がありましたが、その事でお聞きします。私は木が好きで、先生の著作から樫や楡の大木を連想するんです。つまり、学問的・思想的な関心が、多少変容しますが太い幹のようにずっと一貫している。

そこからさらに太い枝が広がっている。また、野原の中の一本の大木のように、丸山先生などの外からの風圧にも曲がらないで超然たる姿勢を保つ。これは大変珍しい現象だと思うのです。何がそれを可能にしたんでしょうか。

小川　思想上氷上先生の影響もあるでしょう。一高時代は一、二ヶ月に一度は必ず先生のところに伺って三時間位粘ってお話し伺いましたし、休暇中も一人で猛勉強して休み明けに「休暇中はこれだけ勉強しました」と先生に報告に行ったりしました。大学進学のとき、哲学と物理の進路選択で非常に迷いました。また、一高時代の寮の同室の者が個性の強い奴ばかりで。後に弁護士として「冤罪」の本を書く後藤昌次郎や、確か板垣退助の直系の孫に当たる宮地らと一緒でした。中国文学の先生になる高田醇とか、大蔵省へ行き代議士になった津島もそうです。彼などにもニヒリストみたいなところがあると僕は思いますよ。僕と仲の良かった連中は皆何処か主流から外れてますね。良く言えば自分の好きな事をやっているわけだけど。法学部に入ってもどのゼミにも属さずにキルケゴール、ハイデッガーばかり読んでました。僕は中学時代から先生一般に対して反抗的で、仲間と共謀して気に食わない先生に白紙答案出したりしました。白紙答案を出したのは実際は僕だけだったようですが……いわゆる「上州気質」なのかな。

古矢　先生の著作は「共感しない部分」にこそ面白さがありますね。つまり他人の論説に関して共感し合う所を喜ぶのではなく、意見の違う点を過大視していく辺りが面白いんですよ。だから非常にひねくれた読み方をされることがあるでしょ。先生が学会の中で主流ではない生き方をされたのも、これが一つの理由になっているんじゃないでしょうか。

小川　もともとそういう性格だし、北海道に居て余計そういう意識が強くなったかもしれない。

オックスフォードにおける研究

松沢　小川先生は六四年九月にイギリス留学を始められまして、六六年八月に帰国されます。次はこの辺りを伺いましょう。

小川　僕がイギリスに留学できたのは、文部省のお金のお蔭です。当時、海外から帰国して来た人々を見ると、前より理論的に鈍くなっているような気がして、僕は外国へ行く必要もないんじゃないかと思っていました。乗り気でない事を教授会で言いましたら、今行かなかったら文部省留学を今後一切断念するものと見做すぞと脅されまして、僕もそれでいいといってた

のを確か矢田（俊隆）先生に宥められました。それから東京の京極さんの所へ行って外国へ行ってもあまり意味はないのではと相談したのです。僕は京極さんも海外へ行ってからシャープさに欠けたような気がしてまして、その事を本人の前で言ったんです(笑)。そうしましたら本読んで解った気になるのは邪道だ、何も考えずにまず行って来いと言われました。これでふんぎりがつきました。それで行って来たわけですが、オックスフォードの二年間は僕の人生の中で最高だったと今でも思っています。

オックスフォードでは僕は後にシニアーに格上げになったんですが、最初は大学院生として入りました。すると入学式に出席しなければならない。丸山先生がオックスフォードで使っていらっしゃったお下がりの黒いガウンを着て行ったんですが、袖が長くて取り換えなさいと付きそいの方に言われた。式の習わしで名前を呼ばれると一人一人立ち上がってラテン語で何か言うんですが、僕はラテン語が出来ないから付きそいの方が代わりに言ってくれました。その付きそいの方がゼルディン氏(現代フランス史研究の権威)だったんです。カレッジで僕が仲良くなったのはゼルディン、ハイファ大学のタルモー、後の労働党代議士エヴァン・ルアードなど、五～六人遠慮なく話し合える友人がいます。向こうは日本に比べて友達を非常に大事にしますね。

クリストファー・ヒルのゼミには良く出席しました。人数制限があって、自分の考えを書いてそれを提出して、選ばれた者だけ入れてもらえる。為になりましたね。それとナフィールド・カレッジのバトラーのセミナーには二年間ずっと出てました。現役の大臣や官僚やジャーナリストのディスカッションが生で聞ける。これは実に面白かった。

それと、僕は始めからイギリスでじかに人々と接しなくては留学の意味がないと思ってましたから、何か調査をやることにした。エヴァン・ルアード氏に相談してオックスフォード近郊の有権者二千人位の小さい町を選びました。ウッドストックという町です。部屋を借りて一年程住んでました。

当時の日課は、まずウッドストックで朝食をして、車でオックスフォードに出ます。大体午前中は、好きな授業に出ました。昼食はカレッジで済ませ、家に帰って、ウッドストックの人々と会いました。だからウッドストックの成人のうちの八割くらい会ったでしょう。いろいろな会にも出席しました。ヴォランタリ・アソシエーションやクラブなどです。夕方は大学でセミナーが週二回くらいありますから。その日はまたオックス

フォードに出て行って夕飯をカレッジで食べて、飲んで、家に帰るのが大体一二時でした。

中村　『英国社会における伝統と変化』の冒頭に「コミュニティ」という言葉が出てまいりますが。

小川　日本で考えていたよりもコミュニティの意識が強いと思いました。特にヴォランタリ・アソシエーションが中心になっています。一番中心になっているのはやはり教会でしょう。教会はコミュニティの中の一番重要なグループ、社交クラブです。コミュニティの中でのクラブの位置というのに、僕は非常に興味を持ちました。そして、『英国社会における伝統と変化』の中心テーマはコミュニティの問題と、それをさえぎる「階級意識の強さ」という点です。階級を単なる理論的なカテゴリーとするのでは十分ではありません。階級を上層、中産、労働に三区分し、次に中産階級を上、中、下と分けて、労働者階級も熟練、非熟練などと分類し、これこれの人がどこに入るか、どのくらい確かにそれができるかが一番むずかしい作業だと思いました。看護婦さんとかトラックの運転手など個々の人々を、そのどこに位置づけたらいいのか、ということに一番苦労しました。職業で分けてよいのか。そうすると職業は無数にあるわけですから。例えば看護婦さんは、僕は中の下ぐらいだと思っていたら、中の中ぐらいに位置づけられているのですね。中学校、小学校の先生は中の中というところです。やはり、僕が面接した全部の一八〇人ぐらいの人々を、個々にどこに位置づけたらいいのかということに、一番頭を悩ましました。このような作業をすると、どれくらい階級区分というものに、一致した意見があるのか、あるいは曖昧さがあるのかということがわかり、階級の具体的な内容が見えてくるのです。これまでの日本の階級理解は、内容が空のXという言葉に過ぎないという面が濃厚です。それと同じ様な特徴は、日本のヨーロッパ研究全般についてもいえると思います。例えば、ブルジョアというふうに我々が言った場合に、フランスでブルジョアというふうに言った時どういう人たちのことか、実際は内容がわかってないで言っていることが多いと思います。ブルジョアというのはその場合、単なる内容の無いXです。大体僕は、日本のやっている学問はそういう内容の無い記号でやっている、数学をやっている様なもんだというように思っています。それは二次文献のみに依拠して直接一次資料にあたらないで論文を書き、日本ではそれで業績になるということに一番典型的に現われています。ですから、留学後は短い論文を書くことは一切やめて馬鹿にされるくらい大作主義になりました。短い論文でやるヨーロッパ研究と

いうのはごまかせる、長いものを書くとごまかしができないでぼろが出るので、長い物を書かなくっちゃ駄目だという意見になりました。

留学中に主に出席したセミナーは、クリストファー・ヒルとデビット・バトラーの主催するものでした。ヒル氏とは河合秀和氏がイギリスから帰国する際に開いたパーティの席で出会いました。ピューリタン革命の研究のためにヒルはちょうどその時期神学に関心を持っていました。僕もその当時は、同様の関心を持っていましたから、ヒル氏とその話しをし、彼のセミナーに出させてもらうことができました。当時は地方史全盛時代でした。若い研究者が地方の、自分の出身地などの一七世紀の状態を報告するわけです。それが大変面白く、僕自身が中世のウッドストックに関心を持ったのもそのためです。

中村　トレヴァ＝ローパーとの関係は。

小川　トレヴァ＝ローパーの講義には出席しました。その講義はものすごく面白かった。頭の鋭い人ですしね。彼は講義する時、太い青縞のワイシャツにきちんとした紺のスーツを着てくるんです。ガウンを着て、レディース　アンド　ジェントルマンと言って始めました。その時に、魔女狩りをやっていましたから、それが後になってトレヴァ＝ローパーの『宗教改革と社会変動』を訳すことになったきっかけです。

中村　どちらかというと、思想的波長はトレヴァ＝ローパーの方が合われたんじゃないかなというふうに思ったんですけど。

小川　近いです。僕はピューリタン革命とかオランダの見方なんかについても彼の議論には賛成です。雑誌は『パースト・アンド・プレゼント』を読んでいました。また、ボードレアン図書館に行って、ロックのマニュスクリプトを読み、そして英語で論文を書きました。それをガフ氏やジェームズ・ジョル氏に見てもらったことがあります。そして、ジョルの言葉に従って帰国後にその論文を圧縮して『ポリティカル・スタディーズ』に載せたいと思っていましたがそのうち、紛争が始まってしまいまして、そのため、原稿がどこにあるのか分らなくなってしまいました。後になって、松沢先生の研究室から出てきて、ほっとしました。

松沢　そうでしたか。（一同爆笑）

中村　先ほどちょっと、旧制高等学校の寮のお話しが出ましたけど、それと英国のカレッジライフと比較していただけますか。

小川　やっぱり、一高よりもセント・アントニーズの方が個人主義的じゃないですか。例えば、僕はハロッドのケインズ伝

を読んで、気がついたのですけど、イギリスのカレッジでは自分の部屋に行くのに、誰にも気が付かないで行けます。こんな細い通路で。日本の寮だとまん中にどすんと廊下があって、部屋はその両側にあるでしょ。だから、廊下通れば、誰か他の人の部屋の前通らなければならない。英国にはそういうのがなくて、細い通路で、誰も気が付かないのに自分の部屋に行けます。そういう個人生活ががっちりしているという半面で、食事などパブリックな席では必ず両側の人と話さなければいけない。だから、集まったときに、気取らないで、仲良くしゃべるということと、いったん、そういう共通な場から離れて自分の部屋に閉じ込もったときは、いっさい妨害されずに自分の生活ができるということと両方があると思いました。

荒木　オックスフォードのセミナーでなぜバーリンやプラムナッツでなくて、バトラーのところに行ったのかということをお伺いしたいのですが。

小川　プラムナッツの講義にはでましたし、バーリンのセミナーには出ました。が、バーリンの話し方にはついて行けませんでした。バトラーのセミナーについては、やっぱり、生の現実にふれられるということが大きかったでしょう。大蔵政務次官だとか、代議士とか、ウィルソンは来なかったけど、そういう人たちがバトラーのセミナーに来て、自由にディスカッションするわけです。その方が生き生きとして面白いですよね。

荒木　ウッドストックで実態調査をやろうとお考えになったのは、行かれてからどれくらいたってからでしょうか。

小川　行ってすぐ、河合さんに、こっちに来て本ばかり読んでいてもしょうがないから、実態調査をやろうと思うんだと相談しました。バーチの英国コミュニティについての本（*Small Town Politics*）など頭にありました。河合さんは、はたしてできるかなと思ったんじゃないかしら。それで、クエスショネアを書いて、ルアード氏などに見てもらいました。大体労働者のことばなんかわからないから、イエスかノーで答の出てくるようなものにしたわけです。

調査をめぐって

荒木　日本に帰ってきてから調査を行なった手稲（札幌近郊）の方は小川先生からいうと余技みたいなものと思いますけど、やられた過程の中で一番関心をもたれたのは何だったでしょうか。

小川　最初は主に地域の有力者を対象とした調査でした。町

のヴォランタリ・アソシエーションにはどういうものがあるかとか、政党が町の中で最初どのようにできるかとか、サンプル調査以前の調査は、町がどういうコミュニティであるかということに対する関心があって、それをやったわけです。

荒木　『大都市の革新票』で、サンプル調査に入った時の関心はどうですか。

小川　一番最初やったのは、七一年の参議院でしたね。あの時はお互いに苦労しましたね。回収率がものすごく悪いのに驚きました。イギリスでやるときには回収率がかなりいいと思ったのに、こっちでは回収率がものすごく悪いという印象がありますね。サンプリング調査という点では、北海道で草分けだったと思います。それと、SPSSを使って分析したのは全国でも早い方だったと思いますが。

荒木　分析にかかろうという時期とSPSSが導入された時期がぶつかって、ちょうどタイミングが良かったということもあります。

古矢　ちょっとよろしいですか。非常に大事な問題が抜けているように思います。行動論というものと先生の思想史的関心とが、先生の中でどのように接合しているかというのが、どうもわからないですね。方法論的に見た場合にはかなり違うわけでしょうから。先生の場合には何でも抱え込んでおられるかもしれないですけど。学問方法論上緊張みたいなものが、先生御自身は自覚されておられるのか、それとも両方ばらばらであってもいいんだというお考えなのか。

小川　ある意味では、両方ばらばらにあってもいいということです。選挙の調査をやる場合に、これも荒木君とはかなり議論したと思うんだけど、投票をもとにするか、あるいは政党支持をもとにするかね、非常に問題にしたんですよね。投票というのは行動ですし、支持というのは直接には外にあらわれないアテテュード、態度です。思想史の立場から見ると支持の方が面白いかもしれない。しかし、確実性に欠けます、内心の問題だから。それで、どっちにしようかと思ってものすごく考えたことがあります。バトラーなんかは投票を中心においていると思います。僕も、確実な方がいいという立場です。コンピューターを使ってやる研究は、それほど内面に入れないものです。内面に入ろうとすると、かえって、あやふやなものしかでてこない。だから、そういうふうなやり方を馬鹿にする人は政治学者にいくらでもいるわけです。思想史やっている人からみると、コンピューターを使ってやった人の結論なんていうのは、馬鹿らしくてしょうがないというようにも言える。僕は、コンピュー

ターを使ってやろうとするならば、確実であり、数量化でき、間違いなくいえるところでやる方がいいのではないかという考えです。だから、別々だというふうに言ってもいいですね。思想史は深く追究するかわりに現実の確実性という点では落ちるし、数量化はできない。コンピューターを使う場合には、内容のうんと濃い結論は出てこないが、それなりの良さがあって無視できない。だから両方敵対させて、軽蔑し合う必要はないんじゃないかと思います。

川人　一つだけ伺いたいのですが、先生の場合、実証研究における理論的関心というのはどのようにお考えですか。

小川　僕は、オックスフォードへ行って以来、理論信仰ではなくなりました。アメリカ人というのは理論が好きですよ。政治学もそうかも知れないですが、特に社会学の人はそうです。社会学の人々というのは、タルコット・パーソンズなんかがそうでしょうが、理論が表面からぐっと出る。そのような訓練を受けた人がヨーロッパの歴史を研究して、イギリスで発表します。そういう人たちは最初、新しい議論か結論が出てくるんじゃないかと期待させるような非常に理論的な枠組みをぱーっと出します。ところが、理論に基づいてやっていくうちに、実に平凡なことしか言ってないということが分ります。オックスフォードで歴史をやっている人々の間には、もともと、理論にたいするいわば軽蔑というのがあります。理論をぱーっと派手に言うのは、一種の知的な成り上がり主義だと言うんです。普通の人間関係で、あまり大きいこと言うと、抑えて言わないと、あいつはおかしな人間だと言われるでしょ。それと同じなんです。オックスフォードのいろんな専門の人が、それぞれのあまり硬い専門の言葉を使わないで、他の人と自由に話しながら、内容を緻密に、言葉を非常に繊細にしていけば、その方が大げさな、大ざっぱな理論よりもはるかにいいという考え方なんです。彼らは、日常言語というのは洗練しさえすれば、いかなる理論的な枠組みにも劣らないという意識を持っているのです。どんな理論が出てきても、自分達の洗練された日常会話の中で処理できると考えていて、ただ理論を表面に出さないだけだと。そういう理論が仮にあるとしても、例えばネミアなんかはあったと思いますけれど、気取らない自然の形で、目立たない形で出す。一見表面は事実だけを並べているように見える。そういうスタイルがオックスフォード歴史学の伝統であり、オックスフォード実証主義だと思うんです。だから、理論はないことはないですね。一つの理論を表面に出すのではなくて、日常言語というのは無数の理論を無数かつ微妙に、組み合わせたものだ

ということになる。僕の現在の立場はこうなのです。だから、少なくとも歴史的リアリティを見つめるときには、あまり理論は大げさに出す必要はないと思っています。しかし、数量分析をやるときは、僕はそうはいかないと思いますが。何か最初枠組みを作らないと、クエスショネアも作れないということになりますから。クエスショネアの数は限りがあるけれど、日常言語は一万も二万も言葉があるわけですから。僕が理論信仰ではなくなったというのは、日常言語を大事にするようになったという、そういう背景があります。ものすごく敏感な人々が日常言語でお互いに話し合って理解し合えるという方がはるかに具体的で内容が濃く、厚いというふうに思ってます。

アメリカ研究

松沢　では、アメリカ研究の話にうつらせてもらいます。

古矢　配って頂いたこの文献リストによりますと、大体一九七七年ぐらいからたて続けにアメリカ関係の業績が四つ出ています。フランス、イギリスときて西漸運動が七七年にはアメリカまできたと考えられますが、先生のアメリカ研究は大体三つぐらいの分野で展開されてきたと思います。一つはおそらく一九五八年に始まるトクヴィルの「アメリカ・デモクラシー」研究、これがおそらく先生がアメリカ研究に踏み込まれた第一歩かと思いますが、トクヴィルとアメリカという問題、これは想像ですが、一貫して先生のアメリカに対する関心の中心をなしてきたといえましょう。もう一つが七七年から出てくるボス・マシーン研究、これはオルバニーにいらっしゃったことをきっかけに、そこのボス・マシーンシステムの歴史と現状を実証的に研究された。これが二番目で、最後はちょっと学問領域自体としては特定しにくいんですけれど、いろいろな分野を含んだ札幌セミナーです。これについても八つほど長い序文を書かれています。それで、この三つくらいに分けて伺っていきたいのですが、初めに、五〇年代、六〇年代の先生はどういう関心をアメリカに対してお持ちになっていたかを伺いたい。おそらく当時は、日本の政治学へのアメリカ政治学の影響が非常に強い時期と思います。例えば、メリアムだとかラスウェルだとかという人達に、例えば永井陽之助先生などはしばしば言及されていらっしゃるのですが、先生の場合は比較的当時のアメリカ政治学への言及は少ないように思います。そこで五〇年代、六〇年代の先生とアメリカとの関わりをまず伺わせていただきたいのですが。

小川　当時、一般的に日本の、特に東京以外の政治学におきまして、主流はマルクス主義が非常に強かったと思います。しかし、東大の政治学研究会ではそれほどでもなかったのです。二、三〇人ほどおりましたが、それほどマルクス主義の影響が強くなかったのです。アメリカ政治学の本がよく読まれました。京極さん、永井さんがそうだったでしょう。永井さんは、当時の出版は多くはないとはいえ、アメリカ政治学の本をほとんど全部読んだのではないでしょうか。しかし、アメリカ政治学そのものを研究の対象にする人は意外に少なかったのです。むしろイギリスを研究する人の方が多かったのではないでしょうか。最初私がトクヴィルをやった時にも、アメリカについてはあまり触れませんでした。主たる関心はフランスの方にありましたから。トクヴィルがアメリカを、いかにフランスの観点から見たかと。ですから、『アメリカ・デモクラシー』でも、第一巻よりも、むしろ第二巻の方に着目しました。アメリカのデモクラシーの現実よりも大衆デモクラシー一般に対する関心の方からです。

アメリカ政治そのものに関心をもつようになったのは札幌にきてからです。永井さん、富田（容甫）さんからよく聞かされましたし、アメリカ（文化）センターからよく呼び出しがかかりました。トクヴィル研究にしても、『アメリカ・デモクラシー』一巻の方に強く関心を向けて書くようになったのは、斉藤真さんが編集なさった『綜合研究アメリカ』の『民主政と権力』にのせた論文がはじめてです。あの時、はじめて、アメリカ政治そのものに目を向けました。これには、一九七二年の大統領選挙のとき、国務省の招待でアメリカにはじめて行ったことが、きっかけになったと思います。その時はイギリスについての大きな本の原稿を書きあげ、出版社に渡した時でした。それで、アメリカに行った時にも、国務省招待のプログラムでは、アメリカ各地を廻ることが予定されているのですが、一つの町をみてみたいと申し出て、一〇日くらいオルバニーにいさせてもらったのです。そして、イギリスとアメリカを比較しようと思ったのです、イギリスのウッドストックとオルバニーとを。まあ、同じアングロサクソンだから似ているところあるだろうと思っていましたが、どうも違っているようなんです。

古矢　何でオルバニーを選ばれたのですか。

小川　地方政治が違っていそうだとわかって、違いを最もきわだたせるものをというふうに考えました。アメリカ政治の年報のようなものがあるでしょう。それでニューヨーク州をみると、オルバニーには、ボス・マシーン政治がなお残っていると

書いてありました。筑紫哲也さん――だと思うのですが――の示唆もあったと思います。当時ワシントンに駐在していたのではないでしょうか。おかげでニューヨーク駐在の朝日新聞社の方々に御馳走になりました。一緒に国務省招待に与ったのが『朝日ジャーナル』の編集にたずさわることになったばかりの高瀬さんでした。それでオルバニーを選んだのです。一〇日くらいいて、ボスとか市長とかに会わせてもらった。まさにボス・マシーンというのはイギリスと違うなと感じました。また、ボス・マシーンに反対して立上った若者たちをみ、やっぱり、アメリカを知るためには、イギリスとの違いを知るためには、まさにこれだと思いました。そのうち、移民の問題に目を向けだし、それで広がったんです。

古矢　『民主政と権力』の中に書かれた論文の中で、トクヴィルを使って一九世紀のアメリカの政治思想の問題を述べてこられて、終わりの方で「アメリカの政治制度は、必ずしもトクヴィルの述べた方向には進まなかった」と言って、ブライスを挙げられて、南北戦争以後発達したマシーン政治というふうに進んで、それでおそらく七七年の論文になっていくんだろうと思いますが、その間に一度アメリカにいらっしゃいましたよね。そこでボス政治ですけれども、三つ論文がありまして、一つはリーダーシップをめぐる問題です。それからもう一つは党組織の問題で、最後はいわばマシーンの末端にいる人達の社会的地位という、この三つの研究を通して広く政治的指導の問題といいますか、それがかなり大きな問題としてあったような気がするんですけど、それもイギリスとの比較の上で。そこで八三年になってお書きになっている「アメリカ合衆国における選挙権拡大の歴史過程」というのは、これはまた一九世紀の問題に戻りますが…。

小川　これは深瀬先生に強制されたようなものです。立法過程研究会でまとめなくちゃいけないので、何か書けというふうに言われて、やむなく書いたんです。（一同笑）

古矢　一九世紀の選挙権の拡大過程を書いた論文としては、非常にまとまっているものじゃないかと思います。どうしてあれが研究ノートになっているのかというのが、ちょっとわからないのですが。

小川　あれはごまかして書いたんです。全部、自分で本当にあたったのではなくて、まご引き、アメリカの本の、まご引きがかなりある。

古矢　この論文は註が非常にしっかりしているように思います。オルバニー論文の方の註は非常に雑ですね。よく読んでみ

ますと、一次資料が註なしで出てきます。一番最後まで読んでくると仕掛がわかって、大体、新聞、ローカルな新聞と人に話を聞いて書いたって書いてあるんですね。普通の手法ですと、それはちゃんと、誰々から聞いて誰々のを見て書いたと註をつけるのですが、先生のは註と本文が渾然一体となっている。オルバニーの論文はそういう感じがします。おそらく、アメリカと面と向って付き合う、図書館に籠らないという先の話しと同じ方法で行なった研究だという印象を持っていますが。

小川　そういうふうにしようと思っていました。ただ、イギリスの場合はどんな片隅にいても身の安全が保障されていたけれども、オルバニーでやるとなると、ちょっと大きな通りからはずれると身の危険があると感じましたからあまりよくできなかったですね、結局は。

古矢　ボス政治の見方ですけどね、二つありますね。政治腐敗の根源とみる見方と、社会福祉が公的な機関で行なわれる以前の福祉供与の主体とみる見方。先生はどの見方に立たれるのですか。

小川　両方ですね。反対派から聞くボス・イメージでいくとかなり偏見があります。しかし、実際会ってみると、そんなことはないですね。反対派はね、たとえばヴォランタリーな活動家の女の人などの話を聞くとボスの悪い所ばっかりいうという感じでした。ミドルクラスの、非常にインテリの女の人がです。ところが、実際ボスに会ってみると、人のいいところがある。人がよくても悪どいというところがあるでしょうけどね。反対派が言うほど悪くはなかったという印象なんです。

古矢　三番目の札幌セミナーのことですけれども、どういうきっかけでセミナーをお始めになったのかということと、それから、先生の政治学の発展の中で札幌セミナーがどういう影響を持ったかということを、お話ししていただければ。

小川　そうですね……これをやってるとき気持ちが楽しいんですよ。それが一番ですね。（一同笑）最初、アメリカ学会に行ったでしょ。そうしたら、話しができる人なんてまずいなかったですよ。孤立していました。政治の先生はあまり出て来ないし、知っている人が二、三人いるだけでした。ところが何年かたつうちに、あの学会に行くと、知っている人がものすごく増えたんです。そういう、人と知り合うという楽しみが三分の一ですね。それから古矢君と喧嘩しながら、他の実行委員の人とわああやっていくのが楽しいというのが三分の一です。（一同笑）それから後、こういう機会に僕の好きなアメリカについて学べるというのが三分の一ですね。やはり僕は一度、アメリカの本

を書いてみたいという野心を持っています。オルバニーについての本、二、三年かもっと後になるかもしれませんけど。特にニューヨーク州のことを、ニューヨーク州の歴史を書いてみたいと思います。

古矢　セミナーで「都市」をやった時に、先生、あの時は序文を書いていらっしゃらないから残念ですけれども、先生はオルバニーの本を将来まとめるまでに、参考になることは拾ってしまおうという、そういう意図はおありだったんですか。

小川　ええ、それはいつもありました。「都市」をやった時には、序文を書く時間がなかったのです。オルバニーには二回行きましたからね。二回目は長くいました。二ヶ月近くです。懐しいって思いがありますしね。

古矢　七二年、七六年にはアメリカは一番悪い時でしょ。

小川　荒れた時期ですね。オルバニーは今行ったらどうかわからないけれど、あの時期は暗かったですね。失業者は多い。でもマクガヴァンの運動がありましたから、若い連中は威勢がよかったですがね。しかし、大きな工場、スケネクタディにあるGEの工場などは、わりとひっそりしていました。あのあたりの軽工業の大きな工場なんて荒れ放題だったですよ。壊すのにもお金がかかるというので、ガラスは壊れても建物はそのまま残ってるわけです。本当に、アメリカの軽工業はだめになってしまったという感じでした。若い連中だけが威勢がよくって、それだけが明るいといった感じだったですね。

古矢　一つお伺いしたいのは、アメリカ研究の中では先生のようなタイプは非常に珍しいと思います。アメリカ研究の外でディシプリンを確立されたうえで、そのディシプリンに基いてアメリカを一つの地域として見る見方は、少なくとも先生の世代ではあまり例がないと思うんですね。そこで地域研究としてのアメリカ研究に、何か先生のご経験からご提言があればお伺いしたいのですが……

小川　提言なんてものはないですよ。アメリカがわかりかけたと今思っているんです。特に今、ヨーロッパ自由主義をやっていて、それとの比較でアメリカ自由主義が多少見えてきているなって感じがするのですが。できれば、自由主義論のなかにアメリカを入れてみたい気がしますが、そこまで力がまわるかどうかわかりません。アメリカ人の良さ悪さ、ヨーロッパ人と比べてね、多少わかるようになるかなと思っているんです。しかし、アメリカ全体を書くわけにはいかないですから、オルバニーを材料にして書けば、実証性とあまり離れないで書けるかなと思っております。提言なんてものはないですよ。もう少し

勉強したいということだけです。

古矢　最後に、札幌セミナーを札幌で始めたきっかけはどういうものか伺いたいのですが。

小川　最も積極的だったのは鈴木重吉さんでした。紛争の時に僕は鈴木さんと教養部で戦友になったんです。それがきっかけで、教養部の総合講義『アメリカ』を始めました。それも、始める時に大学の中でかなり抵抗があったのです。それを鈴木さんが押し切ったのです。そして始めて、経済学部の石垣博美さんも含めて何人かで、一応講義をやるグループができました。総合講義が始まると同時に、東京の方からいろいろな人が来るようになりました。アメリカ関係の研究をしている人や、アメリカ研究の振興に関係している人が。USISとか日米友好基金の人が来るようになったので、講義の関係者がそういう人達と時々会ったんです。その時鈴木重吉さんに引っ張られて出て会っている間に、東京の斉藤真さんからアメリカ研究のセミナーを札幌でやってみないかという勧めがありました。それで日米友好基金が資金を出し、斉藤さんにバックアップしてもらって、一応出発したわけです。最初一回だけやろうということだったのですが、一回やって終わると、斉藤さんがもっと続けたらとおっしゃられて、それじゃ三回位やろうということになったんですが、やっているうちに段々延びていったわけです。しかし、北大の一番強力なリーダーシップを発揮したのは鈴木重吉さんで、それに斉藤さんが東京で全面的にバックアップし、それを日米友好基金のアイヴァン・ホールさんが財政的に支援したのです。鈴木、斉藤、アイヴァン・ホールが中心だったといえましょう。そして鈴木さんがその後東京の方へ移ってしまいましたから、僕が残って、後をとりもったということです。

自由論・権力論

松沢　項目としては七番目になりますが、「自由論・権力論」というまとめ方をしました。これについておうかがいしたいと思います。法学部の『教育研究年報』の小川先生の分の記述は、実に計画的で、第一号にプランが出ていて、後は全部そのプランの実行と修正という形で報告が記されています。前号ではこう書いたけれども、この分のうちこれこれは実行できた、これこれの分はこの程度計画を修正した……そういう形で一貫しています。いかに初めのプランが着実に進んできているということが窺えます。といっても少しずつ変わってはおりますが。一つは、普通のことでしょうけれど、最初の計画が少しずつずれ

て来ている。二番目はそのことの反面ですが、最初の計画が次第に拡大されていって、はじめは論文一つの計画が、上・下二冊の本になりそうであるというように、発展していきます。非常に印象的です。そのような次第で、おそらく、小川先生の理論の構想の原型にあたるものが、遅くともこの『教育研究年報』の第一号までには生まれていたんだろうと思います。その辺について川崎先生からお願いします。

川崎　はい、私はここでは主として、自由、正義、利益、権威、権力、等々といった主要概念を中心とした政治学原論、いわば小川先生の政治哲学の確立というべき段階のお話しについてお伺いします。今、松沢先生から変化があるのではないか、という御指摘がございましたけれども、『教育研究年報』を見ますと、権力という概念が時々出たり入ったりするという印象があります。ただ、先生は「デカダントな社会における統合」の中で既に政治を見る上での主要な概念として、自由、平等、統合、利益という四つの概念を挙げていらっしゃいまして、おそらくこれがもともとの源流なんではないかと思います。で、主要概念の設定の仕方について、いわば小川政治哲学原論の内容の方の問題でありますが、これについて一点お願いします。それから、もう一点は方法の問題についてです。これは先程のイギリス留学のご経験等々から日常言語についてご関心が高まってきたということが話題に出ておりましたけれども、最近お書きになりました自由の問題にしても、権力の問題にしても、コモンセンスとか常識といったようなタームへの言及が非常に増えてくるという印象がございます。日常言語への御関心と、コモンセンスへの言及というのは、恐らくはかなり関係があるのではないかと推測できます。そうした方法上の志向は一方ではイギリス経験に関係があるのかと存じますが、それ以外にこうした御関心を促したものがあるのでしょうか。例えば、素人考えで推測しますと、先生がイギリスに行ってらっしゃった六〇年代は、オックスフォードのJ・L・オースティンのHow to do things with wordsの出版等、いわばオックスフォードの日常言語学派の哲学が開花しつつある、或いは、ヴィトゲンシュタインの後期哲学が知られるようになってくるというような事情、経緯もあったと思います。そうしたものが影響を与えているのかどうか、これがいわば方法についての質問でございます。

小川　川崎先生がむしろ僕の考え方を整理してくれたようなものでして(笑)。政治学の基本的なカテゴリーを幾つか並べるようになったのは、割と新しいのです。「デカダントな社会における統合」では註などでふれていますが、それ程まとまって考

えていませんでした。『教養政治学』という教科書を書いたあたりからです。僕が政治学のキーカテゴリーにはどんなものがあるかと考えだしたのは。

川崎　私の印象では、権力という概念への先生の御関心が段々強くなってきたんじゃないかと思えるんですが、そうではないんですか。つまり、権威という割とスタティックなものへの関心が以前強くていらっしゃったのが、権力というダイナミックな原理への関心の方が段々重くなってきたという印象が多少するのですが。

小川　『教養政治学』ではむしろダイナミックにやり過ぎたという感じはするんです。日本の権力論は戦後は丸山さんが一番初めだったと思います。僕の一高の時、丸山先生が講義に来られて、その時の講義の内容が権力論だったのです。僕は二、三回しか出なかったんですけど、他の人達はみんなおもしろい、おもしろいと言っていました。僕はそれ程おもしろいとは思わなかったですがね。『現代政治の思想と行動』の中の一番最後のものが日本で書かれた権力論の中で一番まとまっていてよいのではないかと思いまして、あれを日本における権力論の一応の代表として、それを批判的に扱うことにしました。戦後はしばらく権力、特に国家権力を真正面から正当化するといいますか、強い権力が必要だというように言うことはタブーだったと思うのですが。ある意味では最近までタブーだったのではないでしょうか。特にマルクス主義者以外は。しかし、僕は政治学の中で権力論を一番の基本じゃないかと、ウェーバーではないですけど思っています。この点では案外、僕は変わってなかったですね。

川崎　それでは、方法の方についてお願いします。

小川　方法についてもそれ程特殊な影響はないんです。ただ、日常言語学派といえば、一九六〇年頃、東大の若手研究者の研究会でギルバート・ライルのConcept of Mindの紹介をしたことがあります。日本では当時東大教養学部の大森さんがライルの本を読んでいたので、大森さんの所に相談に行ったりしましたが、研究発表した本人が、意味がわかっていなかったと思います。何故ライルが日常言語学派といわれて、日常言語をそれ程重んじていたのか、意味がわかんなかったです。意味がわかんないまま紹介しましたね。僕が日常言語を評価するようになったのは、オックスフォードに行ってから、特に七〇年以降です。きっかけはやっぱりバーリンの『自由論』を読んでからですね。バーリンの『自由論』は一見するとそれ程アナリティカルではないんですけど、よく分析しております。彼のいうと

ころによると、自由の一番の基本は「消極的自由」だと、一番素朴で一番確かなのはその「消極的自由」だというわけです。自由の意味を、日常的な言語の意味から外の意味のものに変えるということは、我々人間の生活を広範に変えなければならないことを意味するだろうというわけですね。へーそうかなと僕は思ったんですけれど…。日常よく使われ、よく浸透している言葉で、しかもあまり気取らないで話すときの言葉というのは意外に健全である、その状況、状況において意味を適当に補ってやれば、あまり間違った使い方はしないものだと、そういうふうに考えるようになったのは、やっぱりバーリンがきっかけでしたね。

川崎　権力と権威についてはもう本をお出しになっていますし、また、利益についても先にお考えを聞かせて頂きました。そこで、まだ発表なさってない正義論と自由論について、構想をお聞かせ下さい。

小川　自由については、何とか本を出したいと思ってます。ただ、自由について他の人がどういう意味を与えているのか、そういう整理をするつもりはないです。自由については、既にバーリンについての論文の中で言ってると思いますし、一応、原稿はあるんですけれども、それをやってみる意志はないです。むしろ僕がやりたいのは自由主義ですね。その中で自由の概念分析は多少は出てくると思いますけども。

それとですね、こういういくつかの概念を並べると社会主義というのはどうして入ってないんだと学生から言われるんです。僕は系としては入れてもいいけれども、それが政治学の鍵概念になるとは思わないのです。やっぱり社会主義の源流は権力論と、それに何よりも正義論じゃないかと考えます。正義の中の一項目として入れるけれども、正義の方が基本的なカテゴリーだと思います。これは僕の偏見ですけど、社会主義というのはある意味では一九世紀の末から現代までの一過性の現象だと思います。社会主義の問題はヨーロッパの思想の伝統の中では、正義論に属すると思っております。

川崎　これは、以前、先生が平等というカテゴリーで言ってらっしゃったことを正義というカテゴリーで論じようというわけですね。

小川　そうです。等しいものは等しく、等しくないものは等しくないというのが正義の基本的な考え方だということです。

川崎　では、これが最後なんですが、これは下品な質問で申し訳ないんですが…。

小川　遠慮なく。僕も気軽に答えてますから。

川崎　先生の思想的な立場というものになるんですが、本当、下品なんですが、露骨にそういうことを聞こうというのではないんですけど…。（一同笑）つまり、保守主義の問題について、ちょっとお伺いしたいのです。先生は、少なくとも六〇年代の前半、五〇年代の後半ぐらいから、ずっと保守主義の問題を書かれていらっしゃいますし、それからいろいろ書かれたものを拝見しますと、実体としては、一九世紀のイギリスのアリストクラシーの political prudence のようなものに非常に共感を覚えてらっしゃるという気がしますし、conservative liberal に一種の政治的叡智のようなものを見い出していることが多いような気がしております。その場合、先生御自身が liberal conservative、もしくは conservative liberal と呼ぶべき立場にあるというふうに自己確認なさるのかどうか、というのがお伺いしたい第一の点です。それから、さらに、そうであると仮りに致しますと、それは先生のコモンセンスだとか共同体、カルチャーへの言及と通じるんだろうと思うんですが、それがいわば一九世紀のイギリスのアリストクラシーへの共感を越えて、例えば日本を見る上で何かある有効性を持ちうるとお考えになるのかどうか、というようなことについて、差しつかえなければ、大変下品な質問で申し訳ないですがお伺いいたしたいと思います。

小川　イギリスに住んでいたら liberal conservative だったかもしれません。日本だったら、conservative liberal ですね。僕は、日本でいったら中央左派だと思っているんですけどね。他の人はよく、中央右派だと言うんですけど……。（一同笑）

川崎　その場合の日本における conservative liberal というものの核心というのは何なんでしょう。

小川　やっぱり、理念が先にきて、その後に prudence としての conservative がくっつく。イギリスだったら、現実の中に理念を見つけて、それをもう少し進めていくという訳ですけど、日本の場合は理念の方が先にくるのではないかと、理念を持ち、それを導きの星としなければだめだというふうに思っています。

川崎　それは、つまり逆に言うと、日本の場合は conservative が conservative として引照できる現実みたいなものがないというか、薄いというか、よくないというか、頼れないという、そういうものだからと考えてよろしいですか。

小川　はい。

川崎　わかりました。大変長い間、下品な質問で申し訳ございませんでした。

松沢　川崎さんの、日本を見るうえで有効かどうかという問

題、これは小川先生のお答えにはなかったんですが、僕は非常に有効だという感じがしますね。一九四五年以降の日本における政治学の歴史、政治学の思想史の中で、小川政治学を位置づけてみたいという気がします。前にでてきた、学問の世界の中心に対する周辺みたいな議論になりますけれども。初期に留学前にお書きになった論文の特に註の中で、同時代の学問に支配的な傾向、特に左翼の考え方に随分批判的に論及されていて、今読み直すと、小川先生の若さというか、青春のようなものを感じるのですけれども……それ以降の成熟された現在の著作にも、やはり、直接間接に、同時代の状況に対する関心が読みとれます。話しをうかがっていてもそれを感じる。私はそれは非常に大きな意味を持っていると思います。また私自身は、日本の政治思想史を勉強していく中で、多くのことを小川先生から教わって来ました。逆に言うと、日本の政治思想史、特に近代についての政治思想史の研究は衰弱気味だと思うのですが、それは、やはり小川先生のそれを始めとして、ヨーロッパ政治思想史の研究の成果を十分に受け容れないでしまっているのではないか、それで栄養不足気味になっているところに衰弱の原因の一つがあるのではないかと思うのです。

川人　先に私は、実証研究における理論的関心ということについておうかがいしたんですけど、今度はそれをひっくり返して、小川政治学原論、あるいは小川政治哲学における実証性というのはどのようになっているのか、ということをお聞きしたいと思います。個人的に先生といろいろお話ししていた時に先生から、「僕の理論はabstractだから」というような発言をぽつぽつ聞いたことがあります。すると、理論と実証とは一応接合しないという印象を受けました。他方で、先のところで、クラス（階級）の話がありましたけれども、クラスというのは非常に概念的な構成物であるわけですね。そのクラスについて、看護婦がどこに分類されるかとか、非常に実証的な概念操作化の問題について強いご関心があるというお話しがありました。さらに権力とか権威という問題についても、先生が引照されている研究者は、ほとんどが実証的研究者ですね。ダール、ポルズビー、V・O・キーなどの研究も先生は使われております。この場合には、理論を支える実証、実証的に裏づけられた理論という印象をうけます。そこでそういうことから、理論における実証性のことについて少しお話ししていただければと思います。

小川　そうですね。僕は理論と分析とを区別します。「バーリンの『自由論』」を書いた時には分析的にやったんです。この

中で権力の意味、権威の意味をやる時にはアナリティカルにやる。しかし、それだけでは現実の法則的な把握ができませんから、それとは区別された意味での因果法則的な理論というのを持つ必要がある。しかし、その理論というのが何か一つポコッと飛び出すんでなくて、複眼どころではなく、数多くあった方がよい。ある一つの状況を把握するのにも叙述するにも、理論的に一つのカテゴリーで大雑把にバサッと叙述するより、それを非常にデリケートな言葉、日常言語はそうなんですが、それをいくつも重ね合わせて、ある一つの状況を叙述するのがいいのだということですね。その言葉がどういう意味かということ、これはアナリティカルな問題でしょう。日本の政治学者や政治思想史学でこれをやる人はまずいない。これが日本の政治思想史家の最大の弱点だと思っています。理論はやりますけどね。分析はうんとやらなければだめだというのが僕の考えです。理論というのは、一つの理論だけ大袈裟にやっても現実はとらえられない。いくつもの視点をもつ必要がある。いくつもの視点、一番いいのは、無数の視点ということになる。無数の視点というのは、分析的に意味が明確にされた洗練された日常言語での思考（コモンセンス）と叙述を行なうことだと思うのです。日常言語というのは、洗練されたやり方で使えば対象を限り無くよく叙述できる。そういう潜在力をもつものです。日常言語の中の特定のものだけをとり出し、それを概念化する、理論とはそういうものでしょうが、それを大げさに神格化する（理論信仰）と、議論は現実離れし、片端になってしまう。もちろん理論は学問には不可欠です。しかしそれは、現実離れする危険をいつももっている。数量的分析というものは重要です。しかしその妥当には制約＝条件がある。因果法則は理論の核心をなすものでしょう。しかし、数量分析はこの領域に直接ふみ込んで行くことができない。数量分析をいくらやっても、因果法則に達することができない。数量分析でとらえられるのは、限られた状況で、様々の要因が変量として相関に関係し合っているその相関関係しかとらえられない。数量関係をいくら厳密にして行なっても、因果関係には行きつかない。ところが、コモンセンスと日常言語の世界では因果法則をふんだんにとりいれている。因果法則はコモンセンスと日常言語の世界に属しています。数量分析の世界では、因果関係というのは、単なる仮説であり、証明できない前提にすぎない。数量分析の中で因果関係的な説明を行なうことがある。しばしばそうする。その方が説明は面白い。だが、その説明は数量的な関係ではなくて、コモンセンスと日常言語の世界からする《解釈》以外ではない。しかもそ

うした解釈と説明はまちがいであるとはいえない。権力論というのは一つの因果関係論でしょう。誰々に力があって、誰々に力を及ぼし動かしたというのですから。ある人がある強さの権力をもって他の人を抑えつける、インフルエンスを及ぼすわけですから。ところで、川人先生が法学部でどれくらい力をもっているとか、誰々を抑えたとか、誰々に抑えられたとかと、われわれはしょっちゅう話しをしている。こういう話しを、われわれは全く意味のない話しだとは思わない。論理的にまちがっているとはいえない。しかし純粋な数量分析の世界で話しをしているのではない。権力の議論が意味をもつのは、日常言語のレベルであって、厳密な数量分析の世界ではない。理論が因果法則を含んでいる場合、その理論的可能性は日常言語の世界の上に立ち、数量分析の上に立っているのではない。数量分析は、因果関係の《影》である相関関係をみる。《影》しかみない、が、影は実像の影であるはずだから、影ではあるが、その影を正確にかつ厳密に測定することによって、一定の側面からの実像をよりよく知ることができる。正確に影を測る方法です。

川人　そうですね。数量分析は単なる方法にすぎないですから、権力の因果関係をとらえるには、数量分析を導く理論が必要ですね。その理論自体は数量分析では実証できないでしょうね。

小川　権力の世界、つまり因果関係については数量分析は直接効かない。ではなぜ権力論ができるのか。それは我々がしょっちゅう因果関係を使っている、日常言語の世界だからでしょう。因果関係は無意味ではない。

川人　そうすると、たとえば権力論をやっているダールという研究者がいますね。小川先生の場合、ダールの権力理論、権力の概念化については承認するが、その概念を数量分析に利用できるように操作化する、オペレイショナライズするという点については、重大な疑念を提出するということになるのですか。

小川　影の分析もそれなりの意味はあるということになるでしょう。これ以上の細かい内容の議論になるともっと腰を据えてやらないといけないけどね。（一同笑）

松沢　川人さんの質問を聞いて、うかがい残していたことを思い出したのですけれども、七三、四年頃にミルの『論理学体系』の最初の原稿が完成して、それを政治学研究会と思想史研究会で報告されました。『論理学体系』にとりくまれた関心についてお話しいただけますか。

小川　ミルの著作で今でも一番研究されるのは『自由論』でしょうけれど、『自由論』を理解するためには、ミルの思考様式

がどういうものであるかわかって、『自由論』の論理的な性格を自覚しなければだめだと、『思想』で山下重一さんの本の書評をした時に言ったつもりなんです。ミルの思想構造はどのようになっているのか。『論理学体系』に述べられるミルの公式の思想構造と、現実に彼が『自由論』を書いている場合の議論の進め方が一致するかどうか問題でしょう。くい違いがあるかもしれないけれど、彼の公式の議論の進め方を理解しなければ、『自由論』にもわからない部分がかなりあることになる、というのが僕の考えです。僕はミルの本を出したいと思っていて、原稿もほとんどできているのですけれど、今ミルの『論理学体系』が成立するプロセスに興味を持っています。

松沢　山下さんの本を書評なさったのがちょうど『論理学体系』に向う一つのきっかけだったということは言えるのでしょうか。

小川　一つのきっかけではありました。ただ、現在、別の議論がありまして、ミルの『論理学体系』はケンブリッジには浸透するけれども、オックスフォードには浸透していないというのです。じゃあオックスフォードの論理学では何をやっていたかというとですね。日本でわりと軽く見られほとんどやられていないウェトレーという人です。彼の本をミルが書評しておりますけど、こちらの方がむしろオックスフォードでは正統的なんです。彼は経済学者でもありますが、ウェトレーの方と比較しながらやるべきではないかと『論理学体系』を読んでいる時に思った。その方がおもしろくなるんじゃないかと。ミルの『論理学体系』について書いた原稿は千枚（二〇〇字詰）ぐらいあるんですが、それだけを出す意味はあまりないんじゃないかと感じているんです。今関心があるのは、自由主義がどのくらいヨーロッパ一九世紀の政治とか思考様式に浸透したのかということですので、その一環としては『論理学体系』に興味があります。

松沢　ヨーロッパ自由主義の一環としてのミルにですね。

小川　そうです。

松沢　どういう関係があるのか、簡単に教えて下さい。

小川　この前、政治学研究会で自由主義の報告をした時に言ったことですが、ミルの世界というのは、僕に言わせると経験をもとにするものなのです。経験を合理的に積み重ねていくと宇宙の全構造は把握できるようになろうという考え方なんです。ヒュームの場合には、経験を積み重ねていってもそれなりの認識しか達しない。ミルの場合には、宇宙の全体が経験を積み重ねることによって認識できる、という前提があると思うん

です。前提だけでなくて、そうなるというミルなりの特殊経験的（単純枚挙の一種）証明はできたと自分では思っている。そういうミルなりの宇宙論は、構造的に合理的なものとされている、これが極めて一九世紀的な自由主義の基本である。『論理学体系』は厚い本で、いろいろなことが書いてあるけれど、これにつきるんじゃないか。論理学上の言葉が、いろいろでてきますけど。そこからミルの『自由論』や『経済学原理』を理解したいと思っております。ミルの思想の論理、コスモロジー、あるいは知識論というものをとらえなければミルを完全には理解できない、というのが僕の考えです。しかしそういう考え方は、イギリスの当時のオックスフォード、ケンブリッジではとても受け容れられなかっただろうと思います。国教会が力を持っている、あるいはコンサヴァティヴな勢力がまだ強いですからね。そういう社会の中ではミルみたいな考え方は、刺激は与えたが、心から受け容れられなかった。オックスフォードでは彼のものは教科書にならなかった、評価されなかった。『論理学体系』から、ミルのいろんな社会論、『自由論』などを理解しようとするのがライアン（オックスフォードの思想史家の中での有力者の一人）です。

松沢　川崎さんがとりあげた「デカダントな社会における統合」ですが、はじめの方にモンテスキューが出てきますね。モンテスキューをどういうきっかけでお読みになったのですか。

小川　根岸国孝さんがモンテスキューの『法の精神』を訳している、抄訳なんですけど。僕が東京にいて助手をしている時に根岸さんと平岡孝太郎さんでルソーを訳していたんです。その二人に小池銓、僕とが加わって四人でよく飲んだりしてたんです。で、モンテスキューの『法の精神』を読みました。わりと古いんです。北大に来てから講義でもやりました。僕はモンテスキューの中で『ペルシア人の手紙』と『法の精神』の関係をどう見るべきかということに一番気を使いました。『ペルシア人の手紙』は、ヨーロッパはデカダントである、デクラインしているという見方です。その『ペルシア人の手紙』をヴァレリーがとり上げて、デクラインしているデカダントな社会はよいものだ、しかし、あまりデクラインし過ぎると住み心地が悪くなるので、《終わりの始まり》の時が人間にとって一番楽しく生きやすい時代だという。ヴァレリーによると、ルイ一四世下権威の批判もできないような厳しい体制がデクラインしていって体制のしめつけが緩み始め、そういう権威に対して批判を加える楽しみがでてくる瞬間がくる、権威にただ服従するだけの社会に生きるのはおもしろくないけれど、権威がまだ残っていて、

擬秩序があり、この秩序に外的に依存はできる、が内面的には依存せず、それを批判できる、こうした時代は無秩序ではないが、割と自由である。しかもあけすけに批判できるのなら批判には痛烈さがなくなり、面白くないが、陰に批判ができる、そこには皮肉のきく面白さがある。こうした《終りの始まり》の時代が人間には住むのに一番楽しかろう。ヴァレリーはこう序文を付しているのですが、そのヴァレリーの言葉には非常に興味があった。日本人には発展史観しかなくて、デクラインしていく社会と、そこでの楽しさの観念が全くわからない。僕にはそれが不満で、社会がデクラインしていくとき、人間はどうなるのかという問題が「デカダントな社会における統合」を書いた時にあった。それがモンテスキューに関心をもった僕の一番最初のきっかけです。このデクラインの意識――これは『ローマ人の興隆と没落の原因に関する考察』にもある――と『法の精神』とはどう関係するのか、ということをこの論文のなかでとりあげました。

松沢　「デカダントな社会における統合」という表現をされていますし、社会がデクラインしていくというのは小川先生独特の関心ですね。一方では、社会から活力が失われるのは好ましくないことだという考えがあり、他方では、川崎さんの言われた、四つの価値が統合的に表現されて、人間にとって一番人間的な政治社会はデカダントになりかかった社会であるという認識がある。小川先生の議論には両方が混在しているのではないでしょうか。

小川　ありますね。

川崎　後者は反時代的で前者はやや前時代的。そこの微妙な交錯が非常におもしろいところなんですよ。

小川　イギリスの六〇年代ですね。デカダントでパーミッシブな社会。しかも、パーミッシブではあるけれどもオーソリティがまだあった。カレッジにはカレッジのオーソリティがあるし、カレッジの規律とかマナーとかが、わりと厳しいけれども、陰にかくれて、と言っては何ですけれど、個人生活はかなりパーミッシブになりつつあった、ああいう時代がよいのでないかと思う。七〇年代の末、サッチャーが出る前の外面的な秩序も保証されないような時代というのは、やはり住み心地が悪いですね。六〇年代はよかったし、それからサッチャーが外面的な秩序を回復した時期、八〇年代半ばも悪くはないと感じました。

古矢　誰にとってよいかということが問題にならないのですか。それはインテリの話でしょう。政治体制全体を見ようとする時に、果して政治学者はそれでいいのかという、これは倫理

的な問題ですが、そういう問題は先生の解釈論にないのでしょうか。

小川　まあ例えばですね、六〇年代イギリスだったら、ほとんどの人が五〇年代半ばから六〇年代半ばまで一番いいと、回想して言うんじゃないかしら。

古矢　それはどういう階層の人間にとっても。

小川　ええ。ただ社会が動かなくて、その中で何も事件が起こらなくて、おだやかに気楽に暮らせる、パーミッシブであるという時代は、活力のある若い連中には不満でしょうがね。ヴァレリーのいうのは加速度のことなんでしょうが、力学で言うと速度でなくて加速度。現状不満で自分のヴァイタリティーを発揮したいという人々はいつもいるでしょうから。そういう連中は、社会がダイナミックに動いている、そういう社会の方が生きがいがあるでしょう。その点では、今のイギリスは老人にはいいんでしょうけど、あまり競争がなくて、そういう社会は馬力のある人にとっては住みづらいかもしれませんね。日本の方がおもしろいかもしれません。

松沢　もう一つ、川崎さんの質問とも関連するのですが、小川先生の政治思想史の講義の方についても、うかがっておきたいのです。政治思想史の講義を、政治思想家をとり上げて、政治理論への関心を背景に、分析的に評価するというやり方をなさって来たと思うのですが。またそれに関連して、政治思想史研究と政治理論への関心との関係について、もし一言あればお願いしたいのですが。

小川　僕は今年は正義論をやるつもりで、それはプラトンからです。ヨーロッパの思想史の変化の中で、正義の観念がどういうふうに発展してきたのか、やりたいと思っているのです。日本でも、もともとヨーロッパと同じような出発点があり、鎌倉幕府あたりまではあって、それ以後、秀吉から江戸時代にかけて正義の観念がなくなって、で、また出てくる。何故秀吉から後、幕府ができると正義の観念がなくなってしまうのか、やりたいと思っている。その中に適宜理論を入れていこうと思っているんです。それと「利益意識の論理」ですでに前にやったものです。大ざっぱな原稿はできているのですが、基本的な理論は以前に書いたものを骨にしてやろうと思っています。あれも法則的な理論でなくて、僕なりに分析的な議論だと思っています。社会が現実にこうなっていくという因果的な発展の理論でなく、利益意識を鋭くさせていくとどうなるか、ということを分析していこうと思っています。

荒木　「デカダントな社会における統合」にもどるのですが、

これを日本の歴史にあてはめるとどういうことになりますか。日本の歴史では、例えばデカダントな社会とはどのような時代だと考えているのでしょうか。

小川　この問題はあまり空想的になるから述べなかったのです。さっきの古矢さんのご質問ではないですが、ある社会層が他の層を置いてきぼりにして、あるいは道具にして勃興してくる。やがて文化を爛熟させてゆくが、そのうちその層は衰退していく。それに対して、今まで置いてきぼりにされていた、あるいは道具にされていた層が怒る時がくる。ついに、選手交替するんです。トインビーはそういうように言う。その場合彼は、とり残されていた層を内的プロレタリアートと言うのです。これに対し、外的プロレタリアートとは後進民族（国民）のことです。僕は当時トインビーに関心をもっていたので、そういう言葉を借用しました。交替する人々は、内的プロレタリアートでも外的プロレタリアートでもよいのです。こうした交替は歴史上不断に起る。こう言うと坪井さんにしかられるかもしれないけれど、フランスが第五共和制で伸びたのは、それまでに置いてきぼりになっていた百姓が近代化のエネルギーを爆発させたからだと思います。それまでおよそ文明化されない内的プロレタリアートだった百姓をかかえていた。それが第五共和制下巨大なエネルギーをもって近代化を進めた。日本について言えば、大和民族が興隆し、大化の改新ごろ急速に伸張する。やがて平安時代に文化を爛熟させ、ついで衰退が始まる。保元、平治が転換期の始まりだとはよくいわれるところです。それまで内的プロレタリアートであった地方、やがて武士層が平安末期に選手交替する。武士が興隆し、武士文化をつくる。武士が文化を爛熟させたかどうか疑問ですが、江戸などでやがて町人文化が興隆し、かなり熟したものとなる。あの論文を書いた頃、同じ大学村に住んでいた国文学の大久保先生と通勤で一緒になりました。先生は源氏物語の大家でして、よく日本文化におけるデカダンスについて話しをしました。日本のデカダンスについても絶えず頭にあったのですが、それをいうのは余りにも大胆すぎると思っていたものですから、いい出せなかったのです。

荒木　六〇年代の日本というのを特に頭に置いていた、というわけではないのですね。

小川　そうではないですね。まだあの時期は累積的成長の時代であるとみていました。しかし、やがて累積的成長の時代は終わって、ゼロ・サム的な社会になるだろうと考えていました。日本もなかなかそうならなかったですが。

伝記への関心と研究者論

松沢　それでは、伝記への関心と研究者論に移りましょう。これはすでにとりあげられたイギリス留学に関係しますが、イギリス史学の中心にある伝記の重さに触発されたようです。今まで活字にされたものとしては、『トクヴィルの政治思想』に収められているトクヴィルの伝記があり、『法学部教育年報』には、ロックの伝記とマルボロの伝記が予告されておりまして、私の記憶に間違いがなければ、どちらかは原稿が完成しているはずですが。

小川　イギリス史学では伝記が柱の一つであるということ、これはオックスフォードで痛感しました。もう一つは、日本人が外国を研究する際、階級の問題どころか、すべてXYZでやってしまう。中身はわからなくて、XYZでみんな強引に済ませてしまう。また外国の思想家を日本でやる場合には、思想家をみな神様にしてしまう。ルソーにしたって、ミルにしたって、ほとんど欠陥がないものとしてやる。しかし実際はそうではなかったはずだ。並の人間より、優れたぐらいの能力しかなかったんだ。一旦、そういう思想家を地に降し、血肉を持った人間として理解しなければいけない。さもなければ、思想家の悩みもわからない。日本で外国の思想家をやる場合には、こういうことを必ずしてみなければならないと思ったわけです。僕はトクヴィルを最初やった時に、トクヴィルを神様にしてしまったわけですけれど、神様としてやると見えないところが、普通よりちょっと偉い人間としてみると、理解できるようになるところがある。だから伝記をやらなきゃいけない、伝記から始めて、どういう生活を具体的にしたかというようなことまでやらなければだめだと思ったのです。トクヴィルの伝記はわりと苦労したのですが、今見てみると間違いがあるので、やがてやり直してみたい。固有名詞の読み方の間違いもある。トクヴィルが生まれたのは、パリなんですけど、メイヤーの本では、生まれたのはパリではなくて別の所になっています。僕はメイヤーに簡単に従って、間違いをおかしてしまったのです。しかし、日本の思想史家は、今までなかった外国の思想家の伝記を日本で書くのは想像以上に大変だということを理解していない、というのが僕の感想です。伝記でも、ミルの伝記を書く場合には自伝があるから、自伝に基本的に頼れます。自伝があるとか、外国に伝記がある、そういう人の伝記を書くのは楽だ。しかし、ない人の伝記を書くのは大変なことだ、ということを理解してもらいたいですね。僕はトクヴィルの伝記はほとんど書簡でやっ

たわけです。伝記を書いていて、この人は一八三七年に何をしていたんだろうか、といったところがぽかっと抜けることがある。資料がないところがあるんです。しかし伝記を書く時に空白になっているのは許されない。よほど昔、一七世紀の人くらいまでならそれでもいいでしょうが、一九世紀の人を書くのに、一年間のブランクがあるといったことは許されない。僕は自分のトクヴィルの伝記には一ヶ月の空白もないと思っています。一ヶ月間以下ではどこに住んでいたかわからないことがあって、書いてないことがありますけれども、少なくとも一ヶ月以上いた所はどこにいたかは必ず書いた、そこで何をやっていたかも書いたつもりです。そういう伝記を初めて書く苦労がわかってもらえない……そこに一番苦労したのですけれども。それから、トクヴィルが浮気をしたかどうか、わからない。あの時代、フランスでは特にコネが強い、ネポティズムが強かったのです。トクヴィルのおじさんが首相をやっている。親類なんかは大体探れるのです。ところが女の人のことが手紙でぽこっと出てきて、あの偉い侯爵夫人、伯爵夫人と何かあったのかな、ということになるとわからない。そういうことが大変だったのです。何もないところで伝記を書いてみるというのは、日本で外国を勉強するのにいいのではないか。これが僕の感想ですね。

松沢　最後に、研究者論という項があります。同じ人物論ですけれども、伝記の場合とはちょっと趣向が変わっています。こういう主題を立ててみたのは、伝記の場合には、小川先生の学問的関心の対象としての思想家、政治家ですけれども、研究者論の方は、小川先生がこれまで学問をしていらっしゃる間に、古人・近人を問わず、非常に影響を受けられた、あるいは親近感を感じていらっしゃる、あるいは非常に尊敬されている学者を挙げていただいて、そのことを通じて小川先生の学問論の片鱗をかぎとりたい、という狙いです。先程、古矢先生の方からアメリカ研究の将来に対する提言という話がありましたが、直接の提言というふうになさらなくても、こういう学者論が、学問の後進に対する置きみやげというか、アドバイスになってくれればと思います。すでに氷上先生、丸山先生がでてきました。バーリンもでてきました。しかし例えば、今日まだ名前が挙がっておりませんが、小川先生にとってバーカーの存在というのは随分大きいのではないか、という気がします。気楽に、アトランダムで結構ですから非常に私淑されたとか、影響を受けられた学者について、お話しをお願いします。

小川　バーカーは味わいがあります。伝統と新しい傾向とで釣合がとれています。伝記のことなんですけど、イギリスはそ

ういう伝記の伝統があるんですが、フランスにはない。フランスは、伝記は文学だということで非常に軽視されている国です。ゼルディンの大きな本の二巻目に、やはり伝記という章があったのですが、フランス人は伝記を読まないと言ってます。どうしてかはおもしろいと思います。イギリスでは伝記が非常に重んじられているけれど、フランスでは伝記は歴史学の一部門でなく文学だというのは、僕だけがいっているのではない。

松沢　伝記のところで一つおうかがいしてよいですか。思想家を神様でなくするというのは賛成なんですけど、例えばトクヴィルにしてもミルにしても、書いたものによって思想的な地平というか、知の地平に新しいところを開いているわけですね。仮りにこれを知の革新と言うとすると、伝記研究を非常に緻密にやっていくことによって、ある程度知の革新の根拠みたいなものが出てくるとお考えなのですか。

小川　いいえ。出てこないですね。やはり切れてますよ。生活と思想とは。人間の生活さえわかれば思考は演繹できるなんて、とても言えないですよ。

松沢　そうすると、西欧の政治学史の中で、伝記研究というのは、別に必須の学問分野ではないということになりますね。

小川　いや、伝記をやった方が見えるところが出てくる。比較的見えてくる人と見えてこない人がいる。トクヴィルなんてのは見えてこない方じゃないですか。

松沢　思想的な革新とか知の革新みたいなことは、先生の一般的な意見としては言えないと思うんですけどね。どういう条件が必要か、あるいはどういう場合にでてくるとお考えですか。

小川　それはね、思想家の主体的な、能動的な思考じゃないですか。思想というのは。

松沢　時代にも還元できない？

小川　時代に還元できるところもあるが、そこからかなり独立してもいる。独立している方が偉い思想家だというふうに僕は思っています。

松沢　息子のミルもわかりにくいということですか。

小川　息子のミルの方がわかりやすいね。トクヴィルより。

松沢　父のミルと比べると？

小川　父のミルの方がずっとわかりやすい。単純ですよ。父のミルは。

中村　先生は、生まれた場所とか執筆した机とか、そういうものに興味がありますか。

小川　ええ、住んだ家とか。僕はそういうことに興味があります。ミルのは見たことがありませんけど、父のミルの生れた

スコットランドの家は探しましたが、みつかりませんでした。もう壊れたんじゃないかしら、大した家でもなかったから。

中村　勤めたところは？

小川　行かなかった。トクヴィルの館は行って良かったと思っています。

中村　まだ残っているんですか。

小川　ええ、ほとんど残ってます。書簡などで建物の描写があるようなところをなるほどなあと思って見ました。大した館ですが。

中村　七八年に私がイギリスに行く時に、先生がウォルポールの伝記をコピーして送れとおっしゃったのを覚えているのですが、いつ頃から御関心があったのですか。

小川　もう一五年くらいになりますか。その前からかな。

中村　マルボロもそうですか。

小川　僕はウッドストックをやったでしょう。マルボロはウッドストックに館（ブレネイム・パレス）をもっていましたから。また、僕はアリストクラシーに関心がありましたから。じゃあマルボロの伝記でも、少なくともウッドストックとの関係でもやろうかなと思っていたのです。中世のウッドストックについては書いたことがあります。そのあとも一応原稿にしようと思って、ある程度はできているのですけれども、穴が多すぎて駄目なんですね。地方史をやるのは大変です。そのために地方史家のところとか行ったりしました。しかし、マニュスクリプトを読もうと思っても字が読めないんです。スペルが一七世紀のになると違うのですよ。本格的に先生についてやらないと一七世紀のものは読めないんじゃないですか。で、マルボロをやると必ずウォルポールが出てくるんです。はじめはマルボロの方が偉かったんです。マルボロが総司令官の時に彼は陸軍大臣でした。そのうちウォルポールが偉くなって、今度はマルボロの方が、とくにマルボロの奥さんでサラ、彼女が反抗します。それで一八世紀前半の政治史というのは、ウィッグが分裂するんです。分裂して主流がウォルポールで、反主流に、おもしろい奴が一杯いるんです。サラは相当気の強い女で実に面白い女性です。ポコックの場合には、シヴィック・ヒューマニズムは一八世紀のボーリングブルックとか、むしろ反主流のウィッグとか、トーリーとかから来ているというんですが、はっきりしない。彼はその辺あんまりやってませんからね。ウォルポールの時代の研究は、シヴィック・ヒューマニズムの思想をやるにも役に立ちます。

中村　一九世紀以後のいわゆるステイツマンで、アリストク

ラシーとしてのプルーデンスを持っている人は誰ですか。

小川　やっぱりピールですね。ちょっとラッセルはおっちょこちょい、軽いんです。しゃべりすぎで。パーマストンは、トクヴィルほか皆悪口言いますね。グラッドストンはちょっと偽善的で、ディズレリーは、もっと勉強したらあるいは好きになるかもしれません。

中村　そうすると、マルボロがウッドストックの縁で出てきて、専ら歴史的な関心を持って、後で思想史的に位置づけるようになってきたということですね。

小川　そうです。イギリスでは、僕は一番偉いと思っている学者はバーリンです。それと、バーリンとは一見すると違うように見えるバーカーですね。

松沢　一見すると違うように見える、とはどういう意味ですか。

小川　バーカーは一見平凡ですよ。バーリンの方がはるかにきれるでしょう。違うように見えるけれども、バーリンもコモンセンスの立場に立とうとしてますしね。バーカーの場合には、コモンセンスが基本じゃないでしょうか。新しい考えを絶えずとり上げようとしながら。ラスキはあまり好きじゃないですね。僕はバーカーなんかにひかれます。

松沢　バーカーは政治的な立場から言えば労働党系ですね。

小川　ええ、労働党です。でもそんなきつい労働党員じゃないでしょう。

川崎　オークショットなんかいかがでしょう。

小川　オークショットはスタイルが好きじゃないですね。

川崎　きざですか。

小川　もっとやさしく言えるんじゃないでしょうか。僕はそもそもフランスの、いわゆるノルマリアン的なスタイルが嫌いなんです。あのレトリックが。たいしたこと言ってないのに、たいしたことを言っているようにレトリカルにいう。ゼルディン氏も同じ見方だったですね。僕はフランスの学問、とくに社会科学は一番落ちると思うんです。イギリスの学者ほどは、新しい事実を発見しようという意欲がない。既に発見されている事実を、手を変え品を変えして、その中から新しい側面を描いてみせよう、レトリカルな表現をしようという意欲の方が強いんじゃないでしょうか。フランスで、ノルマリアンが力を失って、ポリテクニシャンの方が力を持つようになったと言うのは、僕は当然だと思いますね。二〇世紀になると双方の勢力が交替するけれども、ポリテクニシャンの方が新しい事実を発見して、そこに法則を見いだそうという立場です。

中村　ゼルディンもそうだという意味はノルマリアンは嫌いだという点で一致しているということですか。

小川　ゼルディンと僕は同じノルマリアン批判だったということです。ビアンコの坪井君の訳した本でも、彼はノルマリアンのフランス語は非常に難しいと書いています。

中村　どういう英語、誰の英語を先生は評価されますか。

小川　日常英語の方がよくわかる。（一同笑）

中村　ヒュームはどうですか。

小川　ヒュームはいいですね、好きです。ヒュームとかスミスとか。J・S・ミルはひっかかる。むしろエスタブリッシュメントのものの方がいいですね。

川崎　フランス語だと、トクヴィルのフランス語は。

小川　いいですね。すっきりしてますしね。

川崎　デュルケームはどうですか。

小川　デュルケームはフランス語で読んだことがありません。

川崎　ノルマリアンと言う時に誰を念頭に置かれますか。

小川　アラン。僕はあまり好きではありません。好きだという人もいますが。

川崎　僕もトクヴィル好きです。と言うのは、トクヴィルは第一にわかりやすいので。

小川　トクヴィルは飾りがないです。ストレートです。やはりトクヴィルなんかには、古典主義の伝統が残っているのではないですか。ところが一九世紀半ばを過ぎますとね、古典主義がひねくれてくる。

川崎　コンスタンは。

小川　コンスタンも難しいですね。

松沢　小川先生の氷上先生の追悼の文章は、とてもいいですね。

小川　あれはちょっと短かすぎる。氷上さんはしょっちゅう内村鑑三のことを言っていたでしょ、だから無教会派のクリスチャンだとばかり思っていたんですけど……

古矢　研究者論でひとつうかがっていいですか。先生だけが、札幌のアメリカ研究クールセミナーに一〇回全部出てらっしゃる、政治のセクションで。それでアメリカ研究の人と随分知り合ったと思うのですが、先生はどういう人が秀れた研究者だとお感じになったかお聞きしたいのですが。

小川　ハイアム氏は偉かったですね。バランスがとれているだけでなくて、キレましたね。パーカー氏はおもしろかったですね。ヘインズ氏もおもしろかったですね。学問的にはわから

ないですが、彼の発言はおもしろかった。こういった偉いアメリカの学者と会って、やっぱりためになりました。一番最初だったから印象が強かったんだろうけど、ハイアム氏は良かったですね。

古矢　研究のやり方では、日本と違うということはありますか。

小川　日本の人が日本のことをやるときの態度は、まだよくわかりません。日本の人が外国のことをやるのとは、全然違うでしょう。

古矢　セミナーのときは、アメリカの人がアメリカのことをやるわけですが、それと日本人が日本のことをやるのとの比較ではどうなりますか。

小川　厚みが違うのではないですか。日本の近代研究は意外とうすいですね。

古矢　小川先生論に転じると、いつもおっしゃっていますが、紛争の時の身の処し方が先生のその後の政治学あるいは政治思想史に非常に大きな影響を与えていると考えていいわけですか。

小川　ある意味では変わらなかったですね。

古矢　何が変わって、何が変わらなかったのか、そこのところのお話しをうかがってみたい。

小川　僕はそれほど権威主義的ではなかった。前も後もね。学生としては古矢先生みたいな人としょっちゅう話しをしていた。話しをしたというよりも議論です。

松沢　途中で口をはさんで申しわけないけど、その小川先生の「議論」なるものに、相手が当惑してしまうんです。僕は非常に印象的で、それにならってあちこちでその手でやったんですけど。先方が「ファッショだ！」なんて言うと、「じゃあ、ファッショの定義をしてみてくれ」と言うんですね。むこうが「資本主義がなんとか」と言うと「資本家の定義は」と問う。「生産手段を持ってるやつだ」と答えると、「車を引いているヤキイモ屋のおばさんは資本家か」と問い返す。そうするとシュンとしちゃうんですね。とても愉快だったけど。それで北大の革マルの中で小川晃一なる教官の政治的立場をどう定義したらよいか問題にしたらしい。

小川　だってあの頃は、先生はやられる一方だったでしょ。受け答えするのにやっとだったでしょ。こっちからもやってやらないと。

荒木　小川先生の著作のいろいろなところに出てくる説得とディベートは違うという意見がありますが、そういった考え方

は、イギリスに行かれた時に強く感じられたんですか。

小川　そうです。説得とディベートは違うということが、はっきりしたのは、イギリスに留学している時ですね。そのあと、北大の学部の講義で二年間、ディベートとは何かというテーマをやったんです。

松沢　僕は断片的には聞いたのですけれど、まとめてうかがえると嬉しいですね。

小川　教養政治学の中に結論だけは書いてあります。

松沢　紛争中、クラーク会館で法学部を封鎖した連中と教官団で対決の討論会をやった時に、小川先生が出てきて、さっきの「資本家の定義いかん？」流のディベートで相手を立ち往生させた。

小川　あとで北大の革マルの中で、小川と議論するなという指令が出たらしいですね。

田口　「権力は竜である」という命題がありますね。それは大学紛争と多少は関係あるのですか。

小川　ないことはないです。『政治権力と権威』の中でも、その見方はかなり使っています。日常的な権力関係と、それが崩れた時に出てくる権力――権力と言えるかどうかさえわからない――とのダイナミズムは性質が全然違うんだ、ということです。

荒木　さきほどの話しですけど、権力の因果性は日常の言語のレベルで云々というお話しがありましたね。しかし「権力が竜」だという見方は日常の言語レベルの因果性の問題からさえはずれたところの議論だという話しになるようです。その次元の議論の根拠は何なのですか。イマジネーションですか。

小川　いや、見る人が見ればわかるでしょう。ただし、それは通常の因果関係の見方や日常言語の妥当する世界ではない。通常の因果関係が切断され、〈偶然〉がどんどん割り込んでくる世界です。それは通常の日常言語の脈絡ではつながらない。プルースト、ジョーイス、第二次大戦後のフランスの反小説や『キャッチ　22』の言語世界です。常人にはそれは竜であり、デーモンとみえる。そうとしか映らない。それを文学でリアルに表現しようとすれば、日常言語での表現は切れ切れで、脈絡のない――〈偶然〉的な――ものとならざるをえない。これができたのは、先のプルーストなどです。しかし、すぐれた思想家は、通常の見方とは質的に異った論理で、権力のダイナミズム、常人の「竜」をとらえ、説明することに成功した。マキアヴェリやトクヴィルがそうです。マキアヴェリは常人の及ばない大胆さで権力集中の在り方を表現し、トクヴィルは、当事

者自身意識しえないような集権化のダイナミズムを見通した。ヘーゲルの歴史哲学にもそうしたものがある。

荒木　日常言語のレベルというのは、普通の人です。見る人が見れば、と言うのは特別のインスピレーションを持った、という意味ですね。

小川　フランスみたいに、政治がダイナミックに変転した社会に生きてる人は、観察には有利さがあるでしょう。しじゅう革命が起きていた。透徹した眼をもっている人には特にね。常人は「竜」の神話に生きるだけかもしれませんが。これに対し、イギリスは政治体制が比較的安定しているから、日常言語の世界が比較的通用してきたのだと思います。

松沢　まだまだ議論が続きましょうし、おうかがいしたいことも残っていますが、そろそろ時間がきましたので、このあたりで。小川先生、どうも有難うございました。